HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	結婚儀礼に現れる帝政末期ロシア農民の親族関係 ： 記述資料分析の試み
Author(s)	伊賀上, 菜穂
Citation	スラヴ研究, 49, 179-212
Issue Date	2002
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38982
Type	departmental bulletin paper
File Information	49-007.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

結婚儀礼に現れる帝政末期ロシア農民の親族関係

― 記述資料分析の試み ―

伊賀上　菜穂

はじめに

本論文*は帝政ロシア農民の親族研究の可能性と問題点を探るため、ヨーロッパ・ロシア北部、旧ヴォログダ県グリャザヴェツ郡の19世紀末から20世紀初頭における結婚儀礼を対象に、記述資料から親族関係の分析を試みるものである。

帝政ロシア農村社会の研究は多様な角度から進められてきたが、家族制度と共同体構造は常にその中心を占めるテーマであった。この二つの社会集団と密接に関係する「親族 (родство)」も農村の重要な社会要素と認識されてきたが、その実態が十分に追究されてきたとは言いがたい。先行研究に現れる親族像は、一方で「大家族 (большая семья)」の構成員として財産権や相続権、扶養義務など法的権利と義務が生じる人々の範囲であり、他方では隣人達と同様に相互扶助を行う単位であった。前者の研究は家族研究、慣習法研究として一定の成果を挙げてきたが(1)、後者のように「家族 (семья)」、すなわち生計を共にする世帯を超えた関係は、分析対象となること自体が少ない(2)。もちろん親族への関心が低い理由としては、ロシア農民が漢人の「宗族」のように明確に意識された親族組織を持たなかったことも挙げられる。19世紀末にヨーロッパ・ロシアを中心に配布された有名なテニシェフ民族学調査のアンケート(3)には、農民の親族に関する詳細な項目が含まれていた。しかしそれに対する回答は少なく、また後年論文としてまとめられることもなかった。

ソ連崩壊後社会の再編成が進む中、人類学や社会学あるいは政治活動のレベルで、革命前と今日の社会の継続または断絶を検討する動きが活発化している(4)。「親族」は民族学および人類学の古典的テーマであるが、現代ロシア社会でも住民にとって重要な意味を持つカテゴリーである。現代社会を過去と比較する中で、ステレオタイプ化した農村社会像を再生産

＊ 本研究は博士論文『ヨーロッパロシア北部における結婚儀礼参加者の役割―その特徴と歴史的変遷―』(大阪大学、2000年)の一部を基に、新たな考察を加えたものである。

1 ロシア農民「家族」の性格を慣習法の視点からとりあげた論争の中で、農民の「親族」概念の解釈が重要な意味を持っていたことについては、吉田浩「近代ロシア農民の所有観念―勤労原理学説再考―」『スラヴ研究』47号、2000年、172-178頁参照。

2 「親族」はロシア、東スラヴ民族学の概説書では独立項目とはならず、「家族 (семья)」の項目で言及されるのが一般的である。См.: *Зеленин Д.К. (перевод Цивиной К.Д.)*. Восточнославянская этнография. М., 1991 (1927); *Александров В.А., Власова И.В., Полищук Н.С.* (отв. ред.) Русские. М., 1997. С.416-465.

3 テニシェフ民族学調査については、坂内徳明「テーニシェフ公爵と彼の『民族学事務局』の活動について」『一橋論叢』第94巻、第2号、1985年、20-40頁参照。

4 この傾向は中央アジアで顕著である。たとえば吉田世津子「経済移行期の親族ネットワーク分析―北クルグスタン・一ソフホーズの解散過程から―」『民族学研究』第48巻、第2号、1999年、149-171頁参照。

し続けないためにも、帝政ロシア農民にとっての「親族」の意味と役割を把握し直すことが必要である。

帝政時代のロシア農民の親族関係に関する資料は少なく、情報も断片的なものが多い。そこで本論文は、数ある農民儀礼の中で親族関係がもっとも広く観察できる結婚儀礼を選択し、そこに現れる儀礼行為と行為者の相関関係を観察した。観察対象の時期を19世紀末から20世紀初頭に限定したのは、資料上の制約によるところも大きい。しかしロシア人にとっての社会主義時代の意味を問うためには、ロシア革命と隣接するこの時代を分析することがひじょうに有効である。もちろん結婚儀礼分析を通して観察できるのは、親族名称や慣習法からのアプローチと同じく、親族をめぐる多様な関係の一側面である。また今回は帝政末期を分析対象としたために記述資料に基づかざるを得ず、必然的に資料上の制約も受けている。それゆえ本研究の目的は、ロシア農民の親族体系を完全に解明することではなく、むしろ今後比較研究を進める上で不可欠となる具体的データを提示することに置いている。

1．先行研究と分析方法

本論文の特徴は、グリャザヴェツ郡という比較的狭い地域を分析対象に設定することによって、記述資料を総体的に分析することである。「総体的」とは儀礼に含まれる全要素を考察対象にすることではなく、儀礼の一部がその全過程と密接な関係を持つことを前提として分析を進めることを意味している。

ロシア人を対象とした親族研究で、親族体系全体の解明をめざすもの、またはそれを民族誌として提示しようとしたものは、筆者が知る限りでは存在しない。ロシア人の親族に関する研究は家族研究の枠内に留まるものが多く、その範囲を超えると親族名称分析が主流となる(5)。その中でもトルバチョフ(6)のような通時言語学的研究が盛んであるが、現代の社会変化に伴う語彙の変化など、社会言語学に基づく研究も存在する。なお日本では伊東氏が、通時言語学をベースに民族学・歴史学的分析も加えてスラヴ社会の概説を行っている(7)。

この他長年の研究蓄積がある分野としては、擬制的親族関係と、親族と地縁共同体関係の研究を挙げられる。前者に関しては、近年ではグロムィコの義兄弟関係、リストヴァの教父母制度の研究が注目されている(8)。後者は主に、農村共同体の土地共同所有や家族への介入といった特徴への関心を共有している。日本でも肥前氏や佐藤氏らがこの問題に関する議論を深化させてきたが(9)、議論の基礎となるケーススタディの不足が目立っている。この分野の中心課題である血縁と地縁の重複については、本論文でも後ほど検討していく。

5　ロシア・ソ連での親族および親族名称研究の動向は次を参照。*Дзибель Г.В.* Аннотированная библиография научных трудов по родству, системам родства и системам терминов родства на русском языке, опубликованных в 1845-1995 // Алгебра родства. Вып.2. СПб., 1998. С.214-283.

6　*Трубачев О.Н.* История славянских терминов родства и некоторых древнейших терминов общественного строя. М., 1959.

7　伊東一郎「社会構造」森安達也編『スラヴ民族と東欧ロシア』山川出版社、1986年、94-115頁。

8　*Громыко М.М.* Традиционные нормы поведения и формы общения русских крестьян XIX в. М., 1986. С.70-92; Листова Т.А. Кумовья и кумовство в русской деревне // Советская этнография. 1991. №2. С.37-52.

9　肥前栄一『ドイツとロシア』未来社、1986年、26-68頁；佐藤芳行『帝政ロシアの農業問題』未来社、2000年、74-89頁。

次に結婚儀礼の枠内での親族研究を見よう。ここでも詳細で質の高い研究は親族の一部だけを扱ったものに多く、親族の全体像を示そうとするものは少ない[10]。親族あるいは参加者全体の把握を試み、なおかつ本研究の方法論に近いものは次の 4 点である。まずボゴスロフスキー[11]は、ロシアの結婚儀礼記述に登場する行為者の儀礼名称を収集し、その分類規則を明らかにしようとした。情報量が膨大であるため分析は十分とは言えないものの、儀礼名称の多様性を学問的に初めて示した意義は大きい。次のグラ[12]の研究も語彙分析である。彼はヨーロッパ・ロシア北部の結婚儀礼に関わる語彙を、全スラヴ的背景の中に位置づける研究の中で、親族名称および参加者の儀礼名称を取り上げている。彼の広い視野と分析資料の多さ、儀礼名称の分析の緻密さは注目に値する。しかし語彙研究の限界として、行為と語彙の結びつきへの考察が不十分である。タルトゥー学派のバイブリン[13]も若き日に記号論からのアプローチを行い、中心的儀礼行為者内での親族と非親族の関係を解析している。これはひじょうに興味深いテーマであるものの、短いレジュメから判断する限りでは、基本構造にこだわるあまり地方差や具体的状況を無視した抽象化を進めていることに問題がある。最後のチストフ[14]の研究は、葬礼の泣き歌に現れる家族構造を考察したものである。泣き歌は結婚儀礼でも歌われるため、彼のアプローチは本論文の方向性に最も近いものであると言える。だがチストフは儀礼行為を分析対象から省き、さらにその関心も大家族から小家族への変遷に限定しているため、その方法論を本論文で採用することはできない。

先行研究を検討すると、親族体系全体を包括しようとする試みは語彙論への偏りが見られ、逆に行為等も含めた詳細な分析は親族関係の全体像を提示できないことが明らかになる。また結婚儀礼研究に限定すると、儀礼の持つ複雑さゆえに多様性の提示か抽象化かという両極に分かれてしまうのが大きな問題である。このような問題が生まれる原因の一つは、多くの研究者が分析対象に「ヴォログダ県」「ヨーロッパ・ロシア北部」「東スラヴ」など極めて広大な地域を設定していることに求められる。これはロシア民族学全体の特徴であり、少数の語彙の分布を調査するタイポロジーには適した方法論である。だが結婚儀礼を総体的に捉えようとする場合、このような対象設定は対象範囲が広すぎて儀礼全体を通観できない原因になると同時に、歴史・経済的背景や儀礼の一貫性を無視したコラージュ的分析を招きやすい。観察範囲を広げることは「どこにも実在しない組み合わせ」を提示してしまう危険性もはらんでいるのである。

---

10 たとえば「ドルーシカ」という結婚式の中心人物については以下の研究がある。 *Зеленин Д.К.* Свадебные приговоры Вятской губернии. Вятка, 1904; *Торопова А.В.* Наговор дружки в поэтической системе свадебного фольклора: Дис...канд.филол.наук. Л., 1974; *Гура А.В.* О роли дружки в севернорусском свадебном обряде // Проблемы славянской этнографии. Л., 1979. С.182-172。これらの先行研究の詳細については、伊賀上菜穂「ドルーシカとは誰か」『大阪大学言語文化学』第 7 号、1998 年、6-9 頁参照。

11 *Богословский П.С.* К номенклатуре и топографии свадебных чинов // Пермский краеведческий сборник. 1927. Вып.3. С.1-64.

12 *Гура А.В.* Терминология севернорусского свадебного обряда (на общеславянском фоне): Дис...канд. филол. наук. М., 1977.

13 *Байбурин А.К.* К описанию структуры русского свадебного обряда // Материалы XXVII научной студенческой конференции: литературоведение, лингвистика. Тартуский гос. университет. Тарту, 1972. С.10-11.

14 *Чистов К.В.* Севернорусские причитания как источник для изучения крестьянской семьи XIX века // Фольклор и этнография. Л., 1977. С.131-143.

以上の問題を鑑みて、本論文では次の 2 点を基本方針とした。第 1 点は分析対象を比較的狭い地域に限定し、経済的、社会的背景等を考慮にいれること、第 2 点は参加親族の全行為を対象として、語彙と儀礼行為の両方から分析を進めることである。

今回の分析では「郡 (уезд)」を観察範囲に設定した。これは文化人類学的方法論に基づく参与観察では広すぎる範囲であるが、資料の不足と儀礼構造の複雑さを考慮すれば、対象をこれ以下に絞ることはできない。ロシアの結婚儀礼は多くの要素から成り立つために完成度の高い記述が少なく、儀礼行為や行為者の記述が欠落したものが多い。そのため近隣地域のいくつかの記述を見比べる必要があるが、比較的均質でまとまった量の資料が入手できる最小単位が「郡」である。

ヴォログダ県グリャザヴェツ郡の結婚儀礼の記述資料は、公文書館保存の未刊行資料[15]と出版資料からなる。今回分析に利用するのは 1898 年から 1924 年までに記述された 12 点であり、詳細の不明な 1 点を除いて全て郡東部を対象としたものであった[16](図 1「グリャザヴェツ郡地図」参照)。この地域を選択した理由は 3 つある。第 1 はグリャザヴェツ郡を対象とした民族学研究がほとんどないこと、第 2 はフィールドワークによって聞き取りと観察による情報の補完が可能となったことである[17]。第 3 の理由はグリャザヴェツ郡の境界的な地理的位置と関係する。グリャザヴェツ郡はヨーロッパ・ロシアの中央部と北部の境界上に

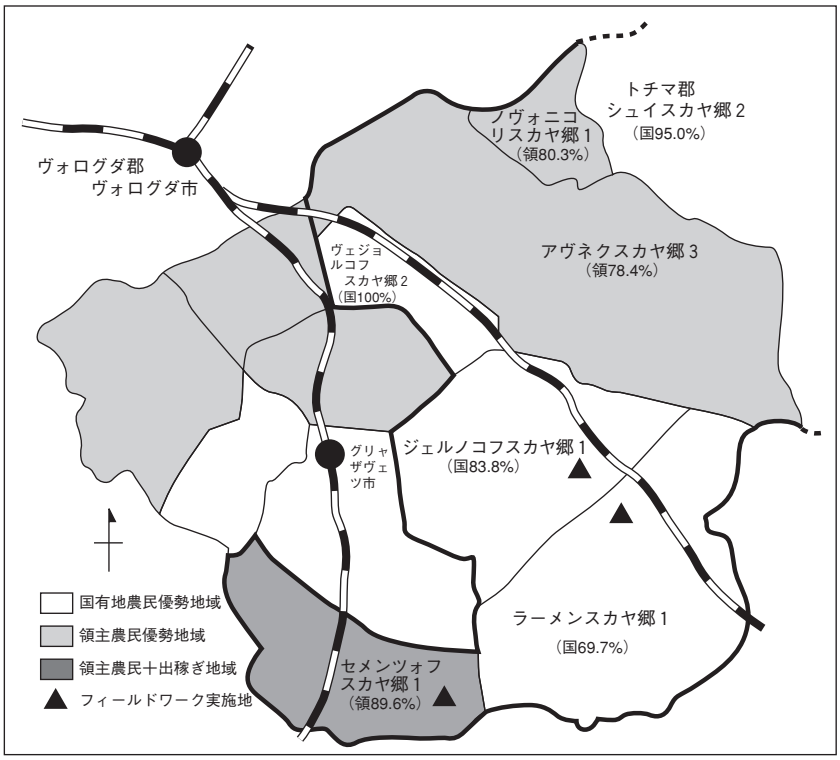
15　今回は次の2つのアーカイヴ資料を使用した。ロシア民族学博物館テニシェフ・フォンド(Архив Российского этнографического музея, Ф.7 [фонд В.Н. Тенишева]. 以下 АРЭМ)、ヴォログダ国立歴史建築芸術博物館アーカイヴ(Вологодский гос. историко-архитектурный и художествен-ный музей-заповедник. 以下ВГИАХМЗ)。テニシェフ・フォンド資料には原本 (Оп.1) とそのタイピング原稿 (Оп.2) が存在する。筆者はタイピング原稿を参照した後、原本と比較し、前者で削除された個所を加筆する方法をとった。本論文内でテニシェフ・フォンドを参照する時は、基本的にタイピング原稿(Оп.2) のページを記し、原本 (Оп.1) は初出時に資料番号のみを記す。ただし Оп.1 または Оп.2 のどちらか一方しか参照しなかったものは、その番号だけを記している。

16　革命後の一時期だけグリャザヴェツ郡に編入されたシュイスカヤ郷 (旧トチマ郡) も分析対象とした。「アヴネクスカヤ郷」*Каменев А.* АРЭМ. Оп.2. Д.192 (Оп.1. Д.180). 1898 (Деревня Дьяконово); *Кузнецов.* АРЭМ. Оп.2. Д.198 (Оп.1不明). 1898 (Д.Быково); *Волков И.В.* Свадебные причеты, записанные крестьянином, часто бывавшим сватом // Живая старина. 1905. Вып.I-II. С.203-225 (Д.Кроптево). 「ノヴォニコリスカヤ郷」*Зверов М.* Свадебные обычаи в Ново-Никольской вол. Грязовец. у. // Известия Вологодского общества изучения Северного края. 1917. Вып.IV. Вологда. С.76-93.「シュイスカヤ郷」*Бубнов Н.* Деревенская свадьба в Шуйской волости Грязовец. у. // ВГИАХМЗ. Ф.157. Д.111. 1921; *Решетова П.А.* Свадебный обряд в д.Поплевино Шуйской вол. Грязовец. у. // ВГИАХМЗ. Ф.157. Д.117. Л.42-46. 1923.「ヴェジョルコフスカヤ郷」*Поздин Ф.Ф.* Свадебные обычаи крестьян Ведерковской вол. Грязовец. у. // ВГИАХМЗ. Ф.157. Д.117. Л.21-32. 1923-24; *Поздин Ф.Ф.* Приговоры дружки на свадьбе Ведерковской волости Грязов. у. // Городок на Московской дороге. Вологда, 1994. С.269-270 (оригинал: Государственный архив Вологодской области (ГАВО). Ф.4389. Оп.1. Д. 171. 1924.).「ジェルノコフスカヤ郷」*Староверов С.* АРЭМ. Оп.2. Д.217-218 (Оп.1. Д.215-216). 1898.「ラーメンスカヤ郷」*Афанасьева А.А.* Свадебный обряд д. Вохтога Раменской вол. Грязов. у. Волог. губ. // Городок на... С.257-269 (оригинал: ГАВО. Ф.4389. Оп.1. Д.172).「セメンツォフスカヤ郷」*Голубцов.* АРЭМ. Оп.2. Д.183 (Оп.1. Д.174). 1898.「郷不明」*Дилакторский П.А.* Свадебные обряды Вологодской губернии // Этнографическое обозрение. 1903. Кн.56. №1. С.25-51.

17　グリャザヴェツ地方でのフィールドワークは 2 回行った。1 回目の調査は 1997 年 8 月の約 2 週間、ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所のクィズラソヴァ И.С.Кызласова 研究員を中心に計 5 名で行った。2 回目の調査は 2000 年 3 、 4 月の約 2 週間、レジャ・セリソヴェート、グリャザヴェツ市、ヴォログダ市で個人的に行った。1 回目の調査結果は以下を参照。 *Игауэ Н.* Свадебные обряды в Грязовецком районе Волог. обл. // Живая старина. 1999. Вып.3. С.18-21.

位置するため、旧領主農民（農奴）優勢地域と旧国有地農民優勢地域、そして出稼ぎ地域と農業中心地という、２種類の経済状況の境界線が郡内を通っている。図１の地図に示したように、分析対象となる７郷のうち、北のノヴォニコリスカヤ郷とアヴネクスカヤ郷、そして南のセメンツォフスカヤ郷の計３郷が旧領主農民優勢地域であり、残り４郷では旧国有地農民が多数派となる(18)。一方産業革命前期の頃から出稼ぎが盛んだった地域は、セメンツォフスカヤ郷の１郷だけである(19)。経済状況の差が儀礼や親族関係に及ぼす影響の有無はほとんど調査されておらず、今後別の地域を分析する上で不可欠な比較データを提出できると考える。

図１：グリャザヴェツ郡地図（1911 年）



＊郷名の右の数字は文献資料数。
＊郷境は Приложение к путеводителю Вологодской губернии (список волостей) // Ежегодник Вологодской губернии. Вологда, 1911. に基づく。
＊各郷の旧国有地農民、旧領主農民の割合は、注 18 の文献を基に計算した。

18　Материалы для земель Вологодской губернии. Т.1. Вып.2. М., 1903. С.120-125; Там же. Т.3. Вып.1. Вологда, 1908. С.304.

19　*Якубов А.Н.* Краткие очерки Грязовецкого уезда // Вологодские губернские ведомости. 1876. №15. С.2 (часть неофициальная).

本論文は以下の構成をとる。まず2章でグリャザヴェツ郡の経済状況、家族構造などを概観し、3章でその結婚儀礼の特徴と地域差を観察する。4章では親族名称に関して標準ロシア語とグリャザヴェツ方言の相違を検討し、グリャザヴェツ方言の特徴と当地の「親族」概念の範囲を確認する。5章では親族の儀礼的行為を、参加時間・場所・具体的内容に配慮しながら検討し、役割分担の法則性、そして親族と非親族との関係を考察する。なおこの分析を行うにあたっては、全記述資料を入力したデータベースを作成し、地域・時代差の無視や強引な単純化を避ける努力をした。最後に6章では帝政末期のグリャザヴェツ郡という限定された対象について、その親族関係の特徴をまとめると共に、現代結婚儀礼に現れる傾向との比較を行う。

本論文での親族名称の表記は以下の規則に基づく。年齢または性別の区別をしない場合、親族名称はカタカナで記す。たとえば「イトコ」が年齢・性別を区別しない表記なのに対し、「従兄弟」は男のイトコ全てを、「従妹」は年下の女のイトコのみを意味する。また「青年」は花婿と同年齢の男性（主に未婚）を、「娘」は未婚女性を指し、その両方を含む場合は「若者」と表記する。さらに「親族」という語は特に注記しない限り、グリャザヴェツ農民の定義範囲を指している。

2．ヴォログダ県グリャザヴェツ郡の地域概要

ヴォログダ県グリャザヴェツ郡はヴォログダ県南西部に位置し、コストロマ県、ヤロスラヴリ県と接する農業地帯である。県都ヴォログダ市と接し、鉄道もモスクワ―アルハンゲリスク線（1872年開通）とペテルブルク―ヴャトカ（キーロフ）線（1905年部分開通）の2本が通っているため、ヴォログダ県の中でも都市の影響が強い地域である。グリャザヴェツの名が最初に歴史文書に登場するのは1538年である。イワン雷帝がコルニリエフ・コメリスキー Корнилиев Комельский 修道院へ出した特権許可書の中で、「修道院領グリャザヴェツ新開部落 Грязовецкий починок 」と記されているのがそれである[20]。この地方は帝政末期にも修道院や教会が多い地域として知られていた。1897年の第1回全国人口センサスによると、グリャザヴェツ郡・郡部の人口は約10万人、そのほぼ100%がロシア人であり、農民比率は97.3%、ロシア正教徒も99.3%を占めていた[21]。

グリャザヴェツ郡には11の郷 (волость) があり、郷の下には村団 (сельское общество) と村落 (деревня, село, погост) があった。村落はヨーロッパ・ロシア北部に特徴的な小規模なものが多い。農村共同体は単に「община」と呼ばれており、ほぼ村落に対応している[22]。教区の規模は様々で、いくつかの郷や郡にまたがるものもある。1902年の資料では教区員数が1000人台のところが多いが、最少で385人、最大で6599人にも及んだ[23]。教区は

20　Грязовец // Энциклопедический словарь (Брокгаус Ф.А., Ефрон И.А.). Т.IX. СПб., 1898. С.828.

21　Первая всеобщая перепись населения Российской империи, 1897 г.: Вологодская губерния. Т.VII. Тетрадь 1. М., 1901. С.1-3; там же. Тетрадь 2. М., 1904. С.2-3.

22　*Н.* Общинное землевладение в Грязовецком уезде // Север. 29-30 янв. 1908. №164-165. Вологда, С.1; *Шляпин.* Статистические сведения о составе волостей Вологодской губернии // Вологодский сборник. Т.3. 1883. С.70-71.

23　*Санитарное бюро Вологодского губ. земства*. Движение населения в Вологодской губернии в 1902 году. Вологда, 1902. С.9-12.

戸籍管理以上の行政機能をもたず、教会関係以外では、教区員を外部の者と区別するような記述も見つからない。グリャザヴェツ郡に関する限り、教区はその構成員に何らかの拘束を与える単位ではなかったようだ。だが教区教会の祭りやそれに付随する市（いち）は人の交流と物流の中心となっており、その範囲は教区内だけでなく教区外や県外にも及んでいた[24]。

前述したようにこの郡には旧国有地農民と旧領主農民（農奴）が存在した。ヨーロッパ・ロシア北部およびヴォログダ県は全体として国有地農民が優勢であるが、グリャザヴェツ郡や県都ヴォログダ市を含む県南西地域では例外的に農奴が多かった[25]。なおグリャザヴェツ郡の旧国有地農民はいわゆる自由民 (черносошные) ではなく、1764 年に教会・修道院領農民が編入されたものである[26]。グリャザヴェツ郡では三圃制農業が行われ、亜麻の栽培、林業、乳製品の製造が盛んであった[27]。農村共同体は土地割替システムを持つが、19 世紀後半から 20 世紀初頭には実際に割替をするところは減少していた[28]。グリャザヴェツ郡と隣接するコストロマ県は出稼ぎが盛んな地域であったが[29]、1870 年代のグリャザヴェツ郡では南部のセメンツォフスカヤ郷のみが出稼ぎ優勢地域であり、生活の中に都市文化の影響が強く見られたという[30]。19 世紀末からは人口増と土地不足により、他の郷でも出稼ぎが増加していった。

グリャザヴェツ郡の世帯規模は、ヨーロッパ・ロシア北部および中央部北側に似てあまり大きくはない。19世紀後半に行われた複数の人口調査から計算すると、グリャザヴェツ郡・郡部の平均世帯人数は 4.5 ― 5.1 人であり、ヴォログダ県の中でもかなり少ない[31]。世帯分割は息子の結婚後数年たって行われることが多かったという[32]。妻が夫の村に住む夫方居住婚が一般的であるが、西ヨーロッパ的視点ではロシアの特徴の一つとされる婿養子 (домовик, приемыш)も普通に見られる現象だった[33]。

---

24 グリャザヴェツ郡の市（いち）については以下を参照。*Протопопов В.* Волостные ярмарки в Грязовецком уезде // Вологодские губернские ведомости. 1844. №41. С.413-415 (часть неофициальная); *Сибирцев И.* Сельские торжки // Городок на... С.218-222 (оригинал: Вологодские губернские ведомости. 1863. №30).

25 Памятная Книжка для Вологодской губернии на 1860 г. Вологда, 1860. Приложение.

26 *Колесников П.А.* Северная деревня в XV - первой половине XIX века. Вологда,1976. С.40-41.

27 *Волоцкой Н.* Состояние землевладельческого и крестьянского хозяйства // Вологодские губернские ведомости. 1873. №31. С.9-10 (часть неофициальная); Грязовец // Энциклопедический словарь.

28 *Н.* Общинное землевладение. С.1

29 コストロマ県農民の出稼ぎに関しては、畠山禎「近代ロシアにおける出稼ぎと人口・家族：コストロマー県北西部の場合」若尾祐司編著『家族』ミネルヴァ書房、1998 年、279-332 頁参照。

30 *Якубов.* Краткие очерки. С.2.

31 ヴォログダ県統計委員会の資料によれば、1881年のヴォログダ県平均が6.1人で同じ南西地域のカドニコフ郡が 6.6 人であるのに対し、グリャザヴェツ郡の平均は 4.8 人であった。なおウォロベックが計算した1897年のヨーロッパ・ロシア中央部・郡部の世帯規模は、グリャザヴェツ郡と南接するヤロスラヴリ県の 4.9 人を最低に、ヨーロッパ・ロシア南部のクルスク、ヴォロネジ県の 6.5 人までの間に収まる。*Шляпин.* Статистические сведения. С.70-71; *Вологодский губ. статистический комитет.* Экономический быт сельского населения Вологодской губернии // Вологодский сборник. 1881. Т.2. С.5-6; C.D. Worobec, *Peasant Russia: Family and Community in the Post-Emancipation Period* (Princeton, Princeton UP, 1991), p.104.

32 *Волоцкой Н.* Состояние землевладельческого и крестьянского хозяйства // Вологодские губернские ведомости. 1873. №30. С.8-9; *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.214. 1898. Л.19-21, 30.

33 *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.214. Л.6-7; M. ミッテラウアー著、若尾祐司他訳『歴史人類学の家族研究』新曜社、1994 年、190-191 頁。

グリャザヴェツ郡の婚姻率は高いが、結婚年齢が極端に低いわけではなかった(34)。テニシェフ民族学調査では、ジェルノコフスカヤ郷の男性の結婚年齢が20－23歳、またアヴネクスカヤ郷で結婚前の若者の集まりに参加できる年齢が、男性で18－28歳、女性が16―22歳と回答されている(35)。通婚範囲は明記されていないものの、小村の多いグリャザヴェツ郡では村は内婚単位となりえず、また結婚儀礼の記述や泣き歌からは、通婚範囲が同村内から教区外にまで及んでいたことがわかる(36)。また1897年の人口センサスでは、グリャザヴェツ郡の郡部住民の97%が同郡の生まれと報告されていることから、通婚圏が郡外にまで伸びていないことも確認できる(37)。結婚が禁止される親族範囲は、教会法（帝国民法）では直系親族と4親等以内の傍系親族であった。教父母（洗礼親）関係にも婚姻の制限が設けられていたが、一般に農民の規則のほうが教会法より厳しい。正教会の正式方針では洗礼親は子供と同性の者一名だけであり、息子の母と息子の教父、娘の父と娘の教母の結婚だけが禁じられていた(38)。一方農民の間では子供一人に教父と教母を選ぶのが一般的であり、教子（洗礼子）と教父母およびその子供たちの結婚が禁止されていた(39)。だがグリャザヴェツ郡の場合、実際に一人の教子に二名の洗礼親が選ばれていたかどうかが明確ではない。この問題は5.2節「結婚儀礼の記述に登場する親族」で再度述べることにする。

3．グリャザヴェツ郡の結婚儀礼

グリャザヴェツ結婚儀礼の各記述には相当な差異が認められるものの、全体に共通した流れもまた存在する。表1はグリャザヴェツ結婚儀礼の一般的な流れを簡略に示したものである。それぞれの場面の名称には地域差があるが、ここでは主要なものだけを記載した。儀礼は「結婚式前（見合いと婚約）」、「結婚式前日」、「結婚式当日」、「結婚式二日目」、そしてそれ以降に分類したが、この流れはヨーロッパ・ロシア中央部、北部の両方に共通している(40)。

34　1897年における30歳以上の未婚者（離婚、死別は含まない）は男性の2.5%、女性の5.8%である。また20歳未満の既婚者は、男性の0.1%、女性の0.3%であった。Первая всеобщая... Тетрадь 2. С.12-13.

35　*Староверов*. АРЭМ. Оп.2. Д.217. Л.10,12; *Каменев.* АРЭМ. Оп.2. Д.192. Л.1. 今回の調査対象より20－30年前にあたる1867－1877年の統計によると、ヴォログダ県郡部全体では男性の62.9%、女性の83%が25歳以下で結婚していた。*Арсеньев Ф.А.* Движение населения Вологодской губернии за десятилетний период (с 1867 по 1877 г.) // Вологодский сборник. 1881. Т.2. С.125-153. また筆者の聞き取り調査によると、1920－1930年代の結婚年齢は男女とも20―25歳前後であった。

36　シュイスカヤ郷の記述では、見合いの席で仲人が花婿の村の長所を説明するために、他の教区を引き合いに出している。またアヴネクスカヤ郷での泣き歌では、花嫁が自分の教会と比較して「そこ［花婿の村］の教会はあまり情け深くない」と歌っている。См.: *Бубнов.* Деревенская свадьба. Л.4; *Волков.* Свадебные причеты. С.220.

37　Первая всеобщая... Тетрадь 2. С.2-3.

38　*Булгаков С.В.* Православие. М., 1994(1912). С.215; Свод законов Российской империи. Т.X. Ч.I. Свод законов гражданских. Пг., 1914. Статья 23.

39　См.: *Листова.* Кумовья... С.39.

40　グラが抽出を試みたヨーロッパ・ロシア北部の結婚儀礼の基本構造は、同中央部、南部の儀礼の多くにあてはまる。また彼が北部の特徴として挙げた教会結婚式と披露宴の分離は、19世紀末の時点ではあまり見られなかった。См.: *Гура А.В.* Опыт выявления структуры севернорусского свадебного обряда // Русский народный свадебный обряд. Л., 1978. С.72-88.

グリャザヴェツ郡の結婚儀礼は、ロシア農村によく見られるように秋からマースレニツァ масленица（いわゆる謝肉祭で２－３月頃）にかけて行われ、特に１月と２月に集中する(41)。結婚申し込み先の選択は青年の親や親戚、あるいは彼自身が行う。花婿と花嫁があらかじめ合意し、それを両親が追認する場合もあれば(42)、花婿の両親が息子の同意を得て（あるいは得ずに）適当な娘を花嫁候補に選ぶこともある。どちらの場合も花婿側から花嫁側に仲人（сват, сваха）が送られるが（сватовство, сговор）、まれに花嫁側から仲人が派遣されることもある。また花婿側が正式な結婚の申し込みをせずに娘を連れ去る駆け落ち婚（самокрутка）も時々行われた(43)。婚約が成立するまでには、双方の家族および親族が互いの家を何度か訪問しあう。花婿や花嫁自身と彼らの財産がチェックされ（смотрины）、花嫁道具や持参金（приданое）の内容、結婚式に関する話し合いが行われる(44)。話がまとまると、花婿宅で婚約締結の宴会が催され（пропивать невесту）、その後花嫁の両親が自宅で二人に祝福を与えることで、婚約が完了する（образовка）。祝福とは、ひざまずいた花婿・花嫁にイコンで十字を切る行為である。

表１：グリャザヴェツ郡結婚儀礼の流れ（19 世紀末～ 20 世紀初頭）

下線は花嫁宅で、枠付は両家で行われる行為。

出会い	青年の親や親戚、あるいは彼自身が花嫁候補を選ぶ。
結婚式前（見合い・婚約・準備）	結婚の申し込み（сватовство）→花嫁宅の見学（смотрины）→花婿宅の見学・合意（пропивать невесту）→最終合意（祝福）（образовка）→結婚式の準備
結婚式前日	花嫁と娘たちの泣き歌（красование, девишник）→花嫁宅での宴会（相互の贈り物）
結婚式当日	花嫁の泣き歌→花婿側の到着（花嫁の売買、謎かけ、祝福）→教会結婚式→花婿宅の宴会（красный стол, книжный стол）（祝福、二人だけの食事、披露宴）→床入り
結婚式二日目	二人を起こす→皿または壺を割る、花嫁に床を掃かせる→花婿宅の宴会→花嫁宅への招待（отозмина, отгостки）
マースレニツァ	花嫁の両親が新郎新婦を招待（на барана）

婚約後花嫁は外出を控え、家で泣き歌を歌い続ける。これは結婚式当日に教会へ出発するまで続く。花嫁の友達である娘たちも花嫁宅に集まり、結婚式当日まで準備を手伝ったり泣き歌を歌ったりする。花婿も時々やって来る。結婚式前日は、花嫁と娘たちの特別な泣き歌の会（красование, девишник）と、花嫁宅での宴会が開かれる。宴会の時、花婿と花嫁は相互に贈り物をする。

41　*Санитарное бюро.* Движение населения. С.48.

42　この地域では娘が青年に結婚約束の印（заклад = 担保）として洋服や小物を渡す習慣が発達していた。

43　駆け落ち婚は一般に花婿と花嫁の両親および花嫁の事前の合意に基づくが、聞き取り調査では花嫁の意志を無視したケースも耳にした。См.: *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.217. Л.13.

44　グリャザヴェツ郡南部および南東部では花婿側からの結納金（подвывод）が記録されている。これは結婚式の費用に当てられるが、中央アジアの婚資（калым）と異なり、結婚成就の必須条件ではない。ロシア農民の結納金の習慣は、比較的遅い時期に貨幣経済の発達とともに広がったといわれている。

結婚式は「свадьба」と呼ばれ2、3日続く。結婚式当日、花婿たちは花嫁を家まで迎えに来る。花婿側の婚礼行列には、花婿の他に、ドルーシカやトィシャツキー、スヴァートなど、特別な儀礼名称を持つ人々が加わるが、花婿の父母は家に残る。花婿はドルーシカらの助けを借りて、花嫁や娘たちの抵抗、花嫁の兄弟による謎かけなどを乗り切り、花嫁のそばに座る権利を手に入れる。その後花婿と花嫁は、花嫁の両親から祝福を受けて、教会へと出発する。双方の両親が出席しない教会結婚式 (венчание) が終わると、一行は披露宴 (красный стол, большой стол) が催される花婿宅に向かう。花婿宅では花婿の父母による祝福、新郎新婦二人だけの食事[45]、宴会を経て、二人を床に連れていく儀礼が行われる。

結婚式二日目は二人を起こすことから始まる[46]。床に撒いたゴミと小銭を花嫁に掃かせる儀礼や、地域によっては壺を割る儀礼が行われた後、宴会の続きが始まる。その後客たちは新婦の実家にお客に行き、再び宴会をする (отозмина, оттостки)。結婚式はこれで終わるが、新婚夫婦はマースレニツァ時に妻の実家に招待される。

グリャザヴェツ郡の結婚儀礼には3つの大きな特徴がある。第一にここではヨーロッパ・ロシア北部で特に発達していた風呂の儀礼が欠如している。第二に同じく北部に特徴的な呪術的要素が比較的少ない。第三に村人による買い取り儀礼 (выкуп) が多様である。風呂の儀礼とは結婚式前に花嫁を風呂で洗うものであるが、この儀礼の欠如はグリャザウェツ郡に「蒸し風呂小屋 (баня)」が存在しなかったことに起因する[47]。二番目の「呪術」には豊穣儀礼などのいわゆる白魔術も含まれるが、ここでは特に邪視とそれへの防御呪術を指している。グリャザヴェツ郡にも魔法使い (колдун) や呪術師 (знахарь) がおり、邪視よけの呪術も記録されているが (アヴネクスカヤ郷とジェルノコフスカヤ郷)、文献でも聞き取り調査でも具体的な言及に出会うことが少なかった[48]。最後の「買い取り儀礼」とは、村人たちが花婿たちに金銭やご馳走を要求する行為を指す。他の地域でも村人たちが道を塞いで婚礼行列を止めたり、娘たちが客たちに「罵り歌」を歌ったりして物品を要求することはよく知られている。しかしグリャザヴェツではこの他に、結婚式前日から二日目に行われるそれぞれの宴会に、既婚・未婚の男女が順番にやってきて、「鞠 (мяч)」や「ロゴスカ (рогозка)」「ウサギ (заяц)」「乙女の美 (девья красота)」「馬 (конь)」「沈黙 (молчанка)」などの代金を要求する。ウサギと馬は人形、乙女の美はリボンで飾った小さな樅で、少女や適齢期の娘たちが持って来る。鞠とロゴスカ（ムシロ (рогожа) ？）は少年や青年、あるいは既婚男性が求めるが、実物が伴わないことが多い。「花嫁の悪口を言わなかった沈黙代」は既婚女性が要求する。その他、宴会にやって来た男たちが新婚夫婦や客をベンチに乗せて揺らし、

45　結婚式当日の花婿宅での宴会では、新郎新婦は飲食を禁止されている。この規則は全ロシアで見られる。

46　記述資料には花嫁の純潔調べが記録されていないのだが、フィールドワークでは冗談化された形での存在を確認できた。花婿の兄弟かドルーシカが花婿に「Грязь топтал ли, лед ломал ли?（泥に踏み込んだか、氷を割ったか）」と尋ねる。彼が「氷を割った」と答えれば、花嫁の純潔が確認される（旧ジェルノコフスカヤ、ラーメンスカヤ郷）。この表現はヨーロッパ・ロシア北部でよく聞かれる。20世紀初頭には、すでに結果が公表されないのが普通だったが、聞き取り調査では次のような話が1件あった。「朝、馬を馬車につないで花嫁の実家に行く。馬の全身を赤いリボンで飾っていたら、花嫁の純潔が失われていたということだ［おそらく逆で、純潔だったということ：伊賀上］（旧ジェルノコフスカヤ郷）。

47　バーニャがなくペチカで体を洗う地域の分布は次を参照。*Желтов А.А.* Русская баня и старинный северный быт // Этнографическое обозрение. 1999. №3. С.35-51.

48　聞き取り調査によると、グリャザヴェツ地方には1950年代まで魔法使いが存在していた。

祝福代を求めることもあった[49]。

グリャザヴェツ郡の儀礼には、以上の共通点の他に多くの地域差も存在する。表2はグリャザヴェツ儀礼のサブタイプとその特徴的要素を示したものである。共通する儀礼要素が観察される地域をまとめると、グリャザヴェツ郡には少なくとも、北東部、南東部、南部(郷不明記述含む)型という、3つのサブタイプがあることがわかる。基本型に近かったヴェジョルコフスカヤ郷(記述1件)と郷内の地域差が大きかったアヴネクスカヤ郷(3件)は対象からはずしている。またどの記述にも他の記述に共通例がない要素が多く含まれていたが、郡内の地域傾向の理解にはつながらないため、検討対象には入れていない。

表2：グリャザヴェツ郡結婚儀礼のサブタイプ

サブタイプ（地域と郷名）	特徴的要素
北東部型： ノヴォニコリスカヤ シュイスカヤ	結婚を断ることを「額（ひたい）に柄杓（お玉）」と表現する。 娘たちが「馬」の買い取りを要求。
南東部型： ジェルノコフスカヤ ラーメンスカヤ	花嫁の兄弟をスヴァートに選ぶ。
南部型？： セメンツォフスカヤ 郷不明	婚約段階を「ザポルキ запоруки」と呼ぶ。 邪術を防ぐため、新婚夫婦の前の道を掃く。 壺割り。

サブタイプはそれぞれ地理的に近接する地域から構成されている。もっとも独自色が強いのは北東部型である。特に花婿側が見合いで断られることを「ひたいに柄杓」と表現するのは、今のところロシア全土を見渡しても類例がない。一方買い取り儀礼の「馬」は北接するカドニコフ郡でも見られる。買い取り儀礼での「馬」の使用は比較的新しい傾向のようだ[50]。南東部2郷には「花嫁側のスヴァート」という珍しい儀礼的行為者名称が存在するが、それ以外は比較的メインタイプに近い。最後のセメンツォフスカヤ郷と郷不明の記述は、「ザポルキ запоруки」という名称を特徴とする。この名称は隣のトチマ郡でも記録されている。ザポルキには花嫁の両親の祝福と結婚式前日の宴会が含まれる。これ以外の南部型の特徴的要素は、ロシア全土でしばしば見られるものである。特に壺割りは、現代のヨーロッパ・ロシア北部の結婚儀礼に欠かせない要素となっている。

地理的に近接した地域における儀礼要素の分布からは、各要素が伝播によって広がった可能性を確認できる。だがそこには旧国有地農民優勢地域と旧領主農民優勢地域をはっきりと区分する特徴は見られなかった。また出稼ぎの影響についても、セメンツォフスカヤ郷の記

49　買い取り儀礼の詳細は以下を参照。伊賀上菜穂「北ロシアの結婚儀礼における若者の参加形態」『大阪大学言語文化学』第9号、2000年、239-252頁；伊賀上『ヨーロッパロシア……』73-78,138-144頁。

50　ノヴォニコリスカヤ郷の「馬」は1918年に記録されているが、カドニコフ郡での記録は1920年代より先に溯らないという。См.: *Ефремов И.В.* (сост.) Вологодский фольклор: народное творчество Сокольского района. Вологда, 1975. С.254.

述が1点しかなく、しかも同地でのフィールドワークで「ザポルキ」という名称が聞かれなかったため、現時点ではそれを確認することはできなかった。だがグリャザヴェツ郡近隣地域には、旧農民カテゴリーや生業形態の違いが儀礼におよぼす影響について、興味深い記述が存在する。まずグリャザヴェツ郡に隣接するヴォログダ郡では、農奴解放後、旧国有地農民と旧領主農民の儀礼差が急速に消滅していく過程が報告されている(51)。また出稼ぎ地域であるコストロマ県ガーリチ郡の記述からも、儀礼パターンがすぐには変化しない様子がうかがえる。この地域は春に新婚夫婦を祝福するという、比較的広範囲で観察される習慣を持つ。しかしこの時、新郎はすでに出稼ぎに行って不在であるため、子供たちは祝福の歌の中で新婦にだけ呼びかけるのである(52)。以上から、対象時代のグリャザヴェツ郡でも、儀礼の基本構造に対する経済状況の影響は小さかったと考えるのが妥当であろう。

4．グリャザヴェツ郡の親族名称

結婚儀礼への親族の参加を分析する前に、「親族」概念と個々の親族名称について現代ロシア語の標準的用法とグリャザヴェツ郡の当時の用法を比較したい。グリャザヴェツ郡の親族語彙は、農民スタロヴェーロフによるテニシェフ・アンケートへの回答(53)と、結婚儀礼記述中の泣き歌や口上、現地農民による叙述部分を対象とした。

スタロヴェーロフは、ジェルノコフスカヤ郷グルボーコヴォ村で「血縁者と姻戚を意味する」言葉として、「родня, родные, свои, родственники」を挙げている(54)。「свои」は「うちの」という意味である。その他の語彙は現代標準ロシア語としても使われ、日本語では「親族」あるいは「親戚、親類」と訳されている。彼はこの範疇に教父母や養子も含めているが、一方で十字架を交換した義兄弟（побратимство）や義姉妹（посестримство）は「родные」と認めていない(55)。また彼は「農民の род（親族、氏族）について」という質問に対し、「グルボーコヴォ村の農民を、ある一つの род に属する者たちと見ることはできない。彼らはそれぞれ別の род に属していると思われるが、村に古老がおらず伝説もないので、それを明らかにすることはできない」(56)と答えている。「それぞれ別の род」とは、名字の違いを指していると思われる。当時この村には21世帯が住んでおり、10種類の名字があった(57)。

スタロヴェーロフが挙げた「親族」を意味する名称のうち、結婚儀礼の記述、つまり叙述部分と泣き歌によく登場するのは、「родня」である。アヴネクスカヤ郷の結婚儀礼の叙述では、「невестина родня（花嫁の親族）、женихова родня（花婿の親族）」という使い方が頻

51　*Александров В.* Вологодская свадьба. СПб., 1863. С.3-7,14.
52　*Макаров А.* АРЭМ. Оп.1. Д.589. 1898. Л.20 (Сельцо Ильинское).
53　*Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.214. Л.1-3.
54　Там же. Л.2.
55　Там же. Л.1-3. スタロヴェーロフは義兄弟または義姉妹を、権利・義務を伴わない単なる友人と見なしている。概してカザークを除くロシア農民の間では、義兄弟は重要な意義を持っていなかった。См.: *Громыко*. Традиционные нормы. С.37-52.
56　*Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.214. Л.1.
57　Там же. Л.4-5.

繁に見られる[58]。結婚式当日の席順が「親族順 (по родству)」と解説されることも多い[59]。また詩的表現の多い泣き歌では「род племени(一族)」という表現もよく用いられている[60]。だがこれらの言葉が頻繁に登場するにも関わらず、その具体的な範囲については主要メンバー（父母、オジ・オバなど）以外ほとんど明記されていない。「родные」に「ближайшие(もっとも近い)、близкие(近い)、далекие(遠い)」をつけた形でもその具体的範囲が不問に付されるが、一度だけスタロヴェーロフによって説明を加えられた個所がある。それによると、「もっとも近い」親族は父母や兄弟などの家族の意味で、「遠い」親族はイトコの意味で使用されていた[61]。ここから農民の「親族」という語は、実際にはかなり具体的で狭い範囲を指して使われていたことがわかる。

次にグリャザヴェツ郡の個々の親族名称を検討したい。本研究における親族名称分析の目的は、グリャザヴェツ郡の特徴を知ることと、結婚儀礼に登場する人物を特定することに限定される。それゆえここでは、親族名称を言語現象としてではなく社会関係として取り扱い、言及用語 (terms of reference) と呼びかけ用語 (terms of address)[62]の分類にのみ注目した[63]。

表 3「花嫁、花婿の視点による親族名称」は、花婿・花嫁を ego として、グリャザヴェツ郡親族名称の用法を現代標準用法と比較したものである[64]。ここに収録した親族名称を比較する限り、二つの用法にはほとんど違いがない。最大の違いはグリャザヴェツで父親を「батюшко, тятя」と呼ぶことであるが、これは農村地方では標準的に使用されていたものである。またグリャザヴェツ方言でも言及用語と呼びかけ用語の使い分けは存在するものの、その差はあまり大きくなく、両者に共通する名称が多い。

この表から読み取れるグリャザヴェツおよびロシア語の親族体系の特徴は、1．父方と母方の区別の欠如、2．同世代間の年齢の上下を問わないこと、3．姻族名称の発達、4．基本血族名称による代用である[65]。第 1 点の父方・母方の区別は、スラヴ共通基語、および現代の西スラヴ、南スラヴ語には存在する。しかし、ロシア語の場合は祖父母、オジ・オバ、イトコとも、父方、母方に関わらず同一名称で表現される[66]。第 2 点の年齢の不問は血族にも姻族にも当てはまる。父母を基準とした「叔父」と「伯父」も、自分を基準とした「兄」と「弟」の区別もない。だがスタロヴェーロフの説明では、兄弟姉妹およびその配偶者間で、親族名称の呼びかけ用語としての使用が、年齢と性別によって制限されていることがわ

---

58 *Волков.* Свадебные причеты. ヴォルコフはしばしば仲人を務めているという農民男性をインフォーマントに選び、彼の言葉をそのままの形で記録しようと試みている。

59 席順については、後述するトィシャツキーやスヴァーハ、教父母が上座（新郎新婦の側）に座ることだけを説明している場合が多い。

60 たとえば以下を参照。*Кузнецов.* АРЭМ. Оп.2. Д.198. Л.10; *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.218. Л.11; *Голубцов.* АРЭМ. Оп.2. Д.183. Л.3.

61 *Староверов.* АРЭМ. Оп.1. Д.216. Л.27. この解説はタイピング原稿 Оп.2. Д.218 では削除されていた。

62 terms of reference と terms of address を「言及用語」「呼びかけ用語」と訳すことについては、以下を参照した。原忠彦「親族名称」原忠彦、末成道男、清水昭俊『仲間』弘文堂、1979 年、276 頁。

63 結婚儀礼に登場する人物を特定するには、親族名称の擬制的用法も取りあげる必要がある。しかしその分析は本研究の主旨から外れ、かつ用例も少なかったので、ここではあえて省略した。

64 表 3 にはロシア語の親族名称全てを記載したわけではない。また泣き歌の内の親族名称には、特に地域差は認められなかった。

65 親族名称の考察では、伊東のスラヴ諸語の分析を参考とした。伊東「社会構造」100-107 頁参照。

66 同上 105-107 頁参照。

表３：花嫁、花婿の視点による親族名称

	自分の親族					配偶者の親族							
	花嫁・花婿共通				花嫁の視点	花嫁から見た夫の親族					花婿から見た妻の親族		
		標準ロシア語	スタロヴェーロフの回答*		泣き歌（形容語は省略）		標準ロシア語	スタロヴェーロフの回答		泣き歌（形容語は省略）	標準ロシア語	スタロヴェーロフの回答	
世代	自分の	言及用語	言及用語	呼びかけ用語	言及用語と呼びかけ用語	配偶者の	言及用語	言及用語	呼びかけ用語	言及用語と呼びかけ用語	言及用語	言及用語	呼びかけ用語
+2	祖父	дед	дед	дедушка		祖父							
	祖母	бабушка		бавшка, бавшенка, бавша		祖母							
+1	親	родители			кормилы, родители, родимые	親				родители			
	父	отец		батюшко, тятя	батюшка, батюшко тятенька, родитель	父	свекор	свекор	батюшко, тятя	батюшко, отец, свекор	тесть	тесть	батюшко
	母	мать		матушка, мама, мамка	маменька, матушка	母	свекровь	свекровь	матушка, мама	матушка, мать, свекровь	теща	теща	матушка
	オジ	дядя	дядя	дедя, дедюшка（父の兄弟）		オジ							
	オバ	тетя	тетка	тета, тетушка（父の姉妹）	тетушка	オバ							
	教父	крестный отец	крестовые	крестный, божатко		教父							
	教母	крестная мать, божатка		крестная, божатка	матушка кресная, божатушка	教母							
0	兄弟	брат	брат	братец（普通名前で呼ぶ）	брат, братец	兄弟	деверь	деверь	братец	братец, деверь	шурин	шурин	братец, побратим（花婿より年上の時）
	姉妹	сестра		сестрица（普通名前で呼ぶ）	сестриченька, сестрица	姉妹	золовка	золовка	сестрица	золовушка, сестрица	свояченица		
	姉妹の夫	зять				姉妹の夫					свояк	свояк	побратим
	兄弟の妻	невестка	сноха	сестрица（花嫁はいつでも、花婿は自分より年上の時に使用）		兄弟の妻							
	従兄弟	двоюродный брат	двоюродные			従兄弟							
	従姉妹	двоюродная сестра				従姉妹							
-1	甥	племянник	племянник（兄弟の息子）			甥							
	姪	племянница				姪							

* *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д. 214. Л. 2-4.

かる。しかしこのような制限は日本語にもある。妹、弟が年長者に「お姉さん」「お兄さん」と呼びかけるのは問題ないが、年長者が年少者を「妹」「弟」と呼ぶことはほとんどないというものだ。それゆえこれを、グリャザヴェツあるいはロシアだけの特徴と考える必要はない。第 3 点の姻族名称の発達はロシア語のよく知られた特徴である。キョウダイの配偶者、および配偶者の父母とキョウダイとその配偶者（妻の姉妹の夫）に個別の名称が与えられ、しかも妻方と夫方で名称が異なる。第 4 点の基本血族名称での代用とは、父母 (отец, мать)、兄弟姉妹 (брат, сестра)、オジ・オバ (дядя, тетя) などの主要血族の名称を、同性・同世代の別の親族にも適用することを指す。表 3 では姻族への拡大使用（兄弟の妻、夫の姉妹を「姉妹 (сестрица)」と呼ぶなど）のみが確認できるが、実際には親等の遠い血族や擬制的親族（教父母、養子）にも使用できるし、擬制的用法（中年男性を「おじさん (дядя)」と呼ぶもの）として他人に拡大することもできる[67]。その結果結婚儀礼の記述でも、ある親族名称が指示する人物が特定できない場合が増加する。

以上グリャザヴェツ郡の「親族」概念を言語範疇として分析してきたが、その特徴は次のようにまとめられる。すなわち「род, родня」等の語彙で表現される当地の「親族」は、父系出自集団を意味するものではない。それは双系的かつ姻族、擬制的親族も含む、個人を中心に (ego-focal) 認識されたカテゴリーである[68]。このような特徴は日本語の「シンルイ」という語に近い。またこの語に包含される具体的範囲もあまり広くはない。その一般的メンバーは、固有の親族名称を持つ範囲、すなわち ego を中心にして直系親族で上下それぞれ 2 親等（孫から祖父母まで）、傍系で 3 親等（キョウダイ、オジ・オバ、甥姪）までであり、それを越えると「遠い親族」と認識されている。

次章では親族名称から得た結果を念頭に置き、結婚儀礼内で親族が行う具体的行為を観察していく。

5．結婚儀礼と親族

5.1　親族と非親族

結婚儀礼の参加者は、親族と非親族に分類できる。親族の役割を具体的に考察する前に、親族が儀礼内で占める位置を非親族のそれと簡単に比較しておこう。

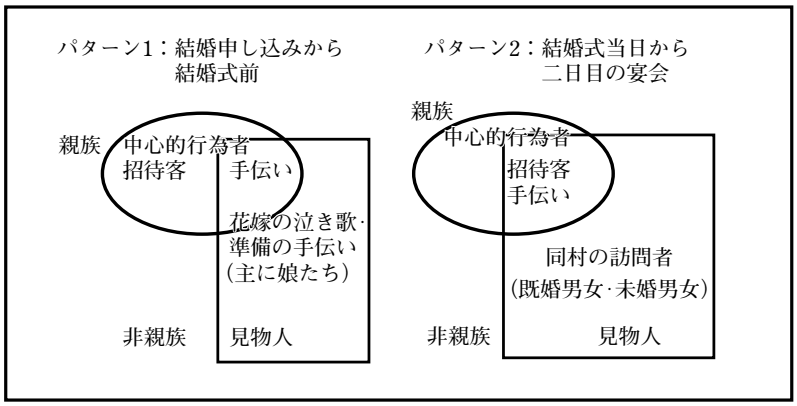
図 2「結婚儀礼における親族と非親族」は、グリャザヴェツ郡の結婚儀礼における親族と

67　ただしそれぞれの用法で使用できる基本血族名称の範囲は異なっている。ロシア語の親族名称の擬制的用法については次を参照。*Окладникова Е.А., Попов В.А.* Вокативные термины родства в функции полово-возрастных апеллятивов в современном русском обществе // Алгебра родства. С.186-195. チストフは姻族と血族が同じ名称で呼ばれる現象を、大家族制後期の特徴と考えている。しかしこれらの名称の多くが擬制的用法を持つことを考えれば、その判断に同意することはできない。*Чистов.* Севернорусские... С.142-143.

68　佐藤氏はロシア農民の親族システムを「キンドレッド(kindred)」という用語で説明している。これは個人を中心として双方的にたどる親族関係を意味しており、筆者も基本的に同意する。だが一般に文化人類学では、「キンドレッド」を血縁関係に限定して使用するが、ロシアおよびグリャザヴェツ郡の「родня」は姻族や擬制的親族も含む概念である。また本論文では「親族」という言葉を「родня」と同義に用いているため、ここでは「キンドレッド」の使用を控えた。佐藤『帝政ロシア』78-80 頁；合田濤「キンドレッド」『文化人類学事典』弘文堂、1987 年、215-216 頁参照。

非親族の役割を、主要な宴会への参加形態に注目してまとめたものである。時間によって参加形態に差があるため、結婚式前と結婚式後の二つのパターンを提示した。それによると、結婚儀礼参加者は三段階に分類できる。すなわち１．中心的儀礼行為者、２．宴会の招待客や裏方、３．その他の参加者である。一見してわかるように、親族と非親族の参加形態は重複している。１はほぼ親族、３は基本的に非親族が占めるが、２は親族・非親族が混在する。

図２：結婚儀礼における親族と非親族



１の「中心的儀礼行為者」は、結婚の申し込みや合意、披露宴などの席で独自の役割を持ち、儀礼を積極的に進めていく者たちのことである。この役割の担当者は基本的に親族から選ばれるが、後述するように、仲人や披露宴の指揮者など、能力と適性を問われる役割は、非親族から選ばれる場合もある。

２の「宴会の招待客や裏方」は、宴会の場で二次的な立場にある人々である。宴会の席に着くが特別な役割を持たない招待客、あるいは裏方として料理や賄いを受け持つ人々が入る。これらの人々の具体的行動は記録されることが希なため、その役割内容には不明な点も多い。結婚式前の宴会は結婚の話し合いと合意を主目的とするため、招待客も基本的に親族だけである。しかし結婚式当日および二日目の披露宴には、親族に加えて隣人の家長たちも招待される。招待を受けなかった人々は、招待された者たちを親族・非親族の区別なく「招待客」（званые, гости）と呼び、買い取り儀礼では全「招待客」に金品を要求する(69)。裏方は調理という内容上、基本的に女性たちに任されるが、常に親族と隣人が混在している。なお招待者側の父母も上座に着かず、裏方の指揮にあたることから、調理を手伝う女性たちもまた、時に招待客としてテーブルに着くという二重のステータスを持つ可能性がある。

３の「その他の参加者」とは、主要な宴会に招待されない「非招待者（незваные）」たちのことである。彼らは主要宴会の席に着かないが、見物人として、あるいは買い取り儀礼の執行者としてテーブルのそばまでやってくる。もっとも彼ら、特に花婿と花嫁の同年齢グ

69　これらの金品は、招待客全員が一人ずつ贈る場合と、中心的行為者（特にトィシャツキー）が代表して渡す場合がある。

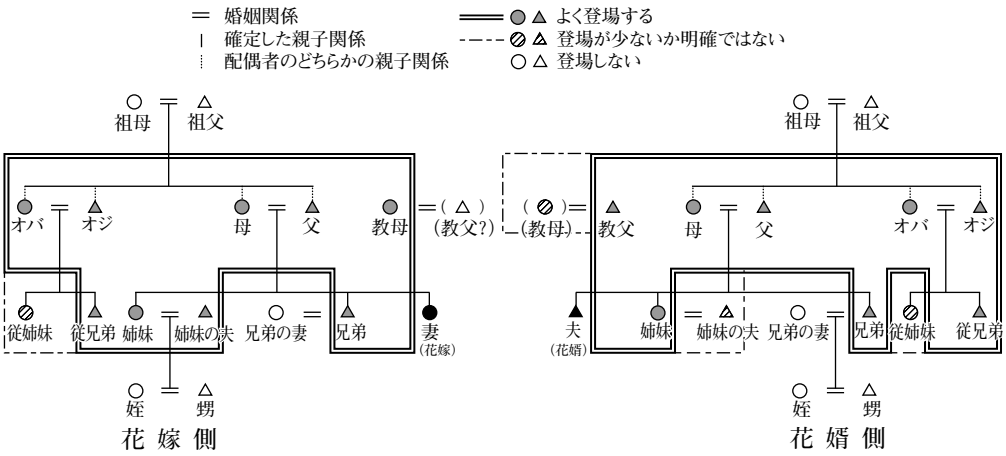
ループは、その他の場面では花嫁を中心とする泣き歌や花嫁道具準備の手伝い、若者の遊びの会（結婚式二日目以降、または当日に、新郎新婦が主宴会とは別に若者のために催す集まり）などに参加する。しかし彼らの集まりは全て、親族が参加する主要宴会に対して時間的、空間的に副次的な位置に置かれている(70)。

以上の簡単な分析から、親族は結婚儀礼の中心的参加者であると同時に、招待客・裏方としては非親族と同等の位置に置かれることがわかる。結婚儀礼に現れる親族関係を理解するには、親族内部の関係と親族・非親族関係の両方向から考察を進める必要があるだろう。次節ではまず結婚儀礼に登場する親族の範囲と、その具体的な役割を観察し、その後親族集団と地縁共同体の関連性を問う。

5.2　結婚儀礼の記述に登場する親族

まずは分析資料に登場する親族の範囲を観察しよう。図３に示したように、グリャザヴェツ郡の結婚儀礼には、父母兄弟姉妹の他、教父母、父方・母方を問わないオジ・オバ、イトコ、およびキョウダイの配偶者が登場する。一方まったく言及がなかったのは、祖父母と甥・姪の上下二世代である。この結果は彼らの儀礼への不参加を意味するものではなく、彼らが見物や臨席以外に積極的な役割をもたないことを示している。グリャザヴェツ郡の外に目を向ければ、子供たちが関わる儀礼行為も存在する。花嫁に男児を抱かせて男の子の出産を願う儀礼は広範囲で見られる。だが結婚儀礼での祖父母の「不在」は全ロシアに共通する現象である。

図３：グリャザヴェツ結婚儀礼の記述に登場する親族



70　たとえば花嫁の泣き歌は、家の中心であるテーブルではなく、台所 (кутьь) で歌われる。結婚儀礼の多層構造については、伊賀上「北ロシア……」248-252 頁参照。

ここでグリャザヴェツ郡独特の傾向として、花婿の教母と花嫁の教父がほとんど登場しないことを指摘したい。例外はジェルノコフスカヤ郷の花婿の教母だけである(71)。前述したように、そもそもグリャザヴェツ郡では一人の子供に二人の洗礼親が選択されるかどうかが明確ではない(72)。スタロヴェーロフはジェルノコフスカヤ郷の教父母の重要性を低く評価していることから(73)、結婚儀礼での特殊性も彼らの脆弱な立場が反映された結果と考えることもできる。しかし正教会の正式方針では洗礼親は子供と同性の者一名だけであったから、かつてこの地に教会・修道院領が多かったことが影響している可能性もある。この問題は他の地域との比較研究によって確認していく必要がある。

次に泣き歌に登場する親族範囲を考察しよう。泣き歌は結婚式前から当日にかけて花嫁の自宅で歌われる。したがってそこで言及される親族名称は、花嫁にとって身近な親族範囲を反映したものと考えられる。表３「花嫁、花婿の視点による親族名称」で示したように、泣き歌に登場する親族は、花嫁側、花婿側とも「父母兄弟姉妹」という核家族の範囲に集中する。これ以外の親族はドルーシカ、トィシャツキーなどの儀礼名称で呼ばれる他は、「親族 (родня)」「一族 (род племени)」「善良な人々 (добрые люди)」といった語彙に包含される。もちろん記述資料に花嫁が歌った泣き歌が全て記録されるわけではないので、訪問者、特にオバや従姉妹などの女性客に呼びかけたものが欠落している可能性は高い。だが「父母兄弟姉妹」は泣き歌の中で「家族 (семья)」の典型的範囲として表現されており(74)、この地で核家族が親族把握の最小かつ基本的単位を構成していたと判断することができる(75)。

5.3　親族の具体的役割

結婚儀礼における親族および客たちの登場時間には一定の傾向がある。結婚儀礼を結婚式前、結婚式当日、結婚式二日目以降に分けると、結婚式当日以外は主に父母やキョウダイなど核家族範囲の親族たちが中心となって参加し、双方の父母の役割も大きい。だが結婚式当日になると参加者の範囲が広がって儀礼的行為者名称も使用されると同時に、父母の役割も相対的に小さくなる。

しかし行為と行為者の関係を詳細に検討しようとすると、記述ごとの違いが大きく、両者の関係が一対一で固定したものが意外に少ないことに気づかされる(76)。特に儀礼名称を持つ

71　*Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.218. Л.2.

72　教子と違う性の洗礼親の存在が確認できるのは、上述のジェルコフスカヤ郷の男児の教母だけである。セメンツォフスカヤ郷における洗礼の記述でも、表現が不明瞭で洗礼親の数を断定できない。なお聞き取り調査では、旧ジェルノコフスカヤ郷で1927年に生まれた女性に、教父と教母がいたことが確認できている。См.: *Голубцов*. АРЭМ. Оп.1. Д.175. Л.7.

73　*Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.214. Л.1.

74　泣き歌はパターンの遵守と即興性の両方を特徴とするため、状況に応じて表現内容も変化する。花嫁が家族に呼びかけるとき、あるいは花婿の家族について歌う時、言及される親族範囲は「父母兄弟姉妹」から「父母」の間で調整される。

75　チストフはヴォログダ県の隣県・オロネツ県の葬式の泣き歌を検討し、1850-70年代には確認できた拡大家族の反映が、1880年代後半の歌からは完全に消滅していることを指摘している。*Чистов*. Севернорусские... С.143.

76　グリャザヴェツ郡内で行為者の選択が一定しない役割でも、他の地域では明確な法則性がある場合があり、またその逆もある。

行為者については、花婿・花嫁との間柄が記録されていないことが多く、行為者の特定を一層困難にしている。以上の状況を考慮して、本節では行為者とその役割の関係を、系譜上の位置（親族名称による分類）と儀礼的行為者名称の二段階に分けて考察していく。

5.3.1　系譜上の位置からみた役割

結婚儀礼内の行為者を花婿・花嫁との系譜関係で把握する場合、行為者と行為の結びつきを基準にして、彼らを主要、準主要、補足的という３つのカテゴリーに分類することができる。主要カテゴリーの親族は重要な固定的役割を持つ者たちである。彼らが不在の場合はその代理人を立てる必要がある。ここには双方の父母と兄弟、そして教父母が入る。準主要カテゴリーでは行為と行為者の関係が一対一で固定しておらず、一定の条件を満たした範囲からの選択が観察される。ここには双方のオジ・オバ、姉妹を含めた。最後の補足的カテゴリーには、他の者の代理や追加として採用される者たちが入る。ここには姻族やイトコたちが含まれる。なお上位カテゴリーは下位カテゴリーの役割も包含するため、上位と下位の行為者が同じ行為をする場合も見られる。

主要カテゴリーのうち教父母を除いた父母、兄弟は当事者の家族である。そのため彼らは結婚式の準備など様々な雑用も行うが、その主要な役割からは彼らが花婿・花嫁の保護者、監督者であることが理解できる。

グリャザヴェツ郡、あるいはロシアの結婚儀礼では、父母は二人一組で登場することが多い。結婚相手を決めるときも、相互訪問を行う場合も、父が単独で行動することはほとんどなく、「儀礼の型」として父母両名が参加する。父母の最も重要な儀礼行為は、子供たちに祝福を与えることである。両親の祝福なしに婚約や結婚はなりたたないと言われ、駆け落ち婚をした場合にも、事後承諾として両親の祝福を受ける必要があると考えられていた(77)。両親はまた「契約の締結者」という意味も持つ。だがこの役割では、家長である父のほうが母より強調される傾向がある。婚約が成立し、花嫁の持参金（物）や結婚式の費用分担の話し合いがつくと、花婿側と花嫁側の両親は「手打ち（рукобитье）」（あるいは покладка(78)）によって合意の確認を行う。グリャザヴェツ郡の記述では実際に誰と誰が手を打ち合わせるかが記録されていないが(79)、他の地域では「父親同士」と明記されたものがある(80)。反対に父より母の重要性が強調される行事もある。結婚式二日目の花嫁宅での宴会（отозмина）に行くことは、一般に「妻の母（теща）のところに行く」と表現される。グリャザヴェツ郡でも、父の子に対する権力は大きいと言われているが(81)、それでも彼の家長としての権限が母を排して成り立つものでないことは、実際の諸事決定の過程からも、儀礼的表現からも理解できよう。

77　См.: *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.217. Л.11.

78　*Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.218. Л.1.

79　グリャザヴェツ郡の手打ちに関する情報は、ほとんど泣き歌の中で歌われたものである。たとえば次を参照。*Афанасьева.* Свадебный обряд. С.257; *Волков.* Свадебные причеты. С.2047; *Зверов.* Свадебные обычаи. С.77-78.

80　たとえば、*Шейн П.В.* (сост.) Великорусс в своих песнях, обрядах, обычаях, верованиях, сказках, легендах и т. д. Т.1. Вып.2. СПб., 1900. С.718（ニージニーノヴゴロド県マカリエフスク郡）.

81　*Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.214. Л.5,9; Д.217. Л.11.

結婚式当日、双方の父母は婚礼行列に加わらない[82]。そのため花婿と花嫁の兄弟各一名が、彼らに代わって一族の代表（の一人）を務める。花婿の兄弟はあまり積極的な役割を持たないものの、花婿側の最重要人物の一人であるドルーシカと同じく肩に目印の手ぬぐい（полотенце. 刺繍を施した長い麻布）をかけ、イコンを持ってそのそばに立つ[83]。花嫁側には儀礼名称を持つ者がほとんどいないため、主要な役割が花嫁の兄弟に集中する。彼は結婚式当日、花嫁の隣の席（花婿の席）をめぐって花婿側に謎かけをしたり、花嫁の乗る馬車（橇）の御者を務めたりする他、父親が既に死亡している時にはその代理として姉妹に祝福を与える[84]。

教父母は主要参加者の中でも準主要カテゴリーと共通する要素を多く持つ。彼らはオジ・オバを含む親族であることも、非親族から選ばれることもある[85]。ロシア全体を考慮に入れると、教父母の最大の役割は、父母に続いて花婿と花嫁に祝福を与えることである。しかしグリャザヴェツ郡では、花婿の教父と花嫁の教母が祝福を与えることは稀である[86]。だがそれでも彼らの結婚儀礼への参加は必須とみなされており、客の中でも特別に高い地位を占める。彼らは花婿側・花嫁側の儀礼名称の最高位であるトィシャツキーとスヴァーハ（花嫁側）に選ばれることも多い。

準主要カテゴリーのオジ・オバ、姉妹も多くの重要な役割を持つ。彼らなしでは儀礼の運営はなりたたない。だが宴会の指揮者や仲人のように特定の能力が必要な役割には、非親族から適任者を選ぶこともある。このカテゴリーの特徴は一定の選択範囲の存在である。選択範囲となっているのは、第一に「オジ」「オバ」という親族範疇自体、第二に「既婚女性」というグループであった。まず「オジ」「オバ」という範疇に含まれる人々は、見合いから結婚式まで、両家族の話し合いや宴会に参加し、両親に助言したりサポートを与えたりする。さらにその後の結婚式でも、彼らはしばしば儀礼的行為者名称を担う。親族名称の分析で見てきたように、「オジ」「オバ」と呼ばれる人物の範囲は広いが、誰をどの役割に選択するかは、父方・母方の違いや年齢の上下であらかじめ決まっているわけではない。具体的な決定は、当事者と彼らの関係によって恣意的に行われるのである。

次の「既婚女性」という範囲には「教母、オバ、姉」が含まれる。仲人（花婿側）や花嫁側のスヴァーハ、結婚式前日に花嫁の贈り物を配る者[87]、同じく前日に花嫁宅を訪問する花

82　革命前のロシアでは、貴族を含む都市住民、農民を問わず、双方の両親が教会結婚式に出席しない習慣が一般化していた。だがロシア正教会の規則および帝国民法にこのような規定があるわけではない。都市結婚儀礼を調査したジルノヴァによると、この習慣は親による強制結婚を防ぐために、ピョートル大帝が1724年1月5日の法令で両親の参加を厳罰をもって禁止したことに由来するという。См.: *Жирнова Г.В.* Брак и свадьба русских горожан в прошлом и настоящем. М., 1980. С.52.

83　シュイスカヤ郷 Поплевино 村では、花婿の兄弟あるいは友人がドルーシカに選ばれる。См. *Решетова.* Свадебный обряд. Л.43.

84　花婿の父も子らに祝福を与えるが、彼の代理に関する記述はなかった。

85　См.: *Голубцов.* АРЭМ. Оп.1. Д.175. Л.7.

86　ラーメンスカヤ郷の花嫁の教母とシュイスカヤ郷の花婿の教父だけが、両親に続いて祝福を与える。*Афанасьева.* Свадебный обряд. С.266; *Бубнов.* Деревенская свадьба. С.17.

87　結婚式前日や当日、花婿側に花嫁の贈り物を配る人物は、花嫁自身の他に、花嫁の姉妹（アヴネクスカヤ郷（*Каменев.* Д.192. Л.3; *Кузнецов.* Д.198. Л.11））、花嫁の教母（アヴネクスカヤ郷（*Кузнецов.* Д.198. Л.11））、スヴァーハ（ジェルノコフスカヤ郷(*Староверов.* Д.218. Л.30)）がいる。

婿側の女性親族[88]はこの範囲から選択されている。既婚の姉が他の既婚女性親族とともに一族の女性代表の役割を担うのに対し、未婚者である花嫁の妹[89]の役割は非親族である娘たち（花嫁の友人の未婚女性）にきわめて近い。妹は娘たちとともに、婚約締結から結婚式当日に花嫁が教会へ出発するまで、花嫁と共に泣き歌を歌う。この時、特に結婚式前日の集まり（красование, девишник）では、花嫁の「もっとも親しい友人」が娘仲間の代表者として特別な儀礼的役割を持つことが多いが、地域によってはその役に妹が選ばれていた[90]。グリャザヴェツ郡ではこのような妹の役割はラーメンスカヤ郷の一件しか記録されていない。それによると花嫁は泣き歌で妹に語りかけ、娘時代の象徴である「乙女の美（девья красота）」[91]をどこに置くべきか、誰にあげるべきかと尋ねている。妹がいない場合は友人の一人が代理を務める[92]。なお儀礼名称を担う男性親族にも「父の世代」という共通点を見出すことができるが、これについては次節以降で分析する。

最後の補足的カテゴリーにはイトコや姻族の他、より遠い親族や非親族も含まれる。このカテゴリーの男性は婚礼行列に加わることもある。だが彼らは行列の規模を大きくするための追加メンバーであるから、必要に応じて省略もされる。また従兄弟や姉妹の夫は兄弟不在時にその代理を務めることがある。これに関してはグリャザヴェツ郡南東部できわめて興味深い事象が記録されている。ここでは結婚式前日に花嫁の兄弟を「スヴァート」と呼んで花婿側に招待し、花嫁側との仲介を依頼する習慣があったが、兄弟の代理には姉婿が従兄弟より優先的に選ばれていた[93]。この場合の姉婿は婿養子（домовик）、つまり花嫁の実家の跡取りである可能性が高い。グリャザヴェツ郡の記述には兄弟の妻や従姉妹などはほとんど登場しないが、他の地方では姉やオバの代理として登場することもある。

結婚儀礼における姻族の重要性は、グラの研究成果によっても裏付けられる[94]。彼はヨーロッパ・ロシア北部の結婚儀礼の記述における親族名称の言及頻度を計算し、花婿の親族の言及頻度は「1．教父、2．兄弟、3．父、4．教母、5．オジ、6．母、姉妹、姉妹の夫など」の順に、花嫁側は「1．教母と父、2．母、3．兄弟、4．姉妹、5．兄弟の妻、オジの妻、姉の夫、6．オジ」の順番になるという結果を得た。もっとも言及頻度は実際の登場回数や重要性を反映しているとはかぎらない。たとえばグラの計算ではオジ、オバの順位が比較的低いが、これは彼らが儀礼名称で呼ばれることが多いからであろう。それでもこの順位表に姻族が登場することは、彼らの「親族」としての重要性の現れと理解することができる。

---

88 この習慣はジェルノコフスカヤ郷でしか記録されていない。結婚式前日、花婿たちが花嫁宅を正式に訪問する前に、花婿の姉妹または教母がピローグを持ってやって来る。*Староверов.* Д.218. Л.2.

89 ロシア農民全体に、可能な限り娘を年齢順に結婚させる習慣があるので、花嫁の妹は一般に未婚である。См.: *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.217. Л.11.

90 トチマ郡の例としては次を参照。*Балашов.* Русская свадьба. С.208.

91 「乙女の美」は、買い取り儀礼に登場する樅の木の他、リボンや一本のお下げなど未婚女性を象徴するもので表象される。また泣き歌の中ではしばしば擬人化される。

92 *Афанасьева.* Свадебный обряд. С.263-264.

93 Там же. С.260; *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.218. Л.1-2.

94 *Гура.* Терминология... С.61.

5.3.2　儀礼的行為者名称から見た役割

ロシア農民の儀礼的行為者名称は多様であるが、グラが指摘したように大きく二つに分類することができる[95]。一つは重要なメンバーに与えられる主要名称であり、もう一つはパンやビールの給仕などごく限られた役割だけを示す二義的名称（пивник、каравайникなど）である。

表 4：グリャザヴェツ郡の儀礼的行為者名称

	言及頻度	儀礼名称	性別	家庭訓	人物の選択 (数字は件数)	役割(行為)
花婿側	◎ (8)	トィシャツキー тысяцкий	男	○	教父(4)；教父以外(1)；もっとも近い親戚(1)； 言及なし(2)	名誉職。宴会の最重要人物。ドルーシカ、スヴァートと役割の重複がある。
	◎ (11)	ドルーシカ дружка	男	○	言及なし(10)；花婿の兄弟か友人(1)	婚礼行列の中心人物。
	◎ (8)	スヴァート、スヴァーハ、スヴァーチヤсват, сваха, сватья（仲人）	男女 両方可		近い親戚［含姉・オバ］(4)；同村人(1)；知人(1)； 言及なし(2)	見合いの世話。
	△(5)	スヴァート сват(当日)	男		言及なし(5)	ドルーシカ、仲人に近似。
	× (2)	スヴァーハ сваха(当日)	女	○	仲人(1)； 言及なし(1)	ドルーシカ、スヴァートに近似（花婿の贈り物を渡す）。
	× (1)	ボリショイ・ブラート большой брат	男		花婿の兄弟(1)	ドルーシカとともに行動。
	× (1)	ボリショイ・バーリン большой барин、 メーニシー・バーリン меньший барин	男		花婿の従兄弟など(1)	婚礼行列に参加。
花嫁側	×(2)	スヴァート сват	男		花嫁の兄弟(姉婿)(2)	花婿側と花嫁側の仲介。
	◎(7)	スヴァーハ сваха	女	○	教母(2)；教母以外(2)；言及なし(3)	花嫁の代理や世話、花嫁側の代表。

言及頻度　◎多くの記述で言及あり。△半分ほど。×例外的。(　)内は言及があった記述の総数。

95　Там же. С.64.

表4はグリャザヴェツ郡の儀礼的行為者名称（以下儀礼名称）の一覧である。当地域では儀礼名称があまり発達しておらず、二義的名称はほとんどない。また花婿側と花嫁側の比率は7対2、男女比は仲人を女性に数えても6対3と、多くの名称が花婿側の男性に割り当てられている。ここに挙げた名称の多くは他の地域でも見られるものであるが、中でもトィシャツキー、ドルーシカ、スヴァーハは15－16世紀に編纂された『家庭訓』にも登場する古い名称である(96)。これらの名称は言及頻度も高いが、一方ボリショイ・ブラートやボリショイ・バーリン、メーニシー・バーリンは、1、2の記述にしか登場しない。だが儀礼名称の有無は参加者構造を根本的に変えるというわけではない。後者の儀礼名称の担い手は花婿の兄弟や婚礼行列の追加的メンバーたちであるが、彼らは儀礼名称なしで登場することが多いからである。それよりもむしろ分析で問題となるのは、同じ儀礼名称でもその役割内容が記述ごとに大きく異なっていることである。以下では花婿側のトィシャツキー、スヴァート、ドルーシカ、および花嫁側のスヴァートとスヴァーハについて、その中心的な意味と役割を考察していく。

「トィシャツキー」は本来千人隊長を意味する言葉であり、結婚儀礼では「長老」という意味を持つ名誉職である。教父のほか、親族内でもっとも尊敬されている男性が選ばれる。彼は常に花婿のそばにおり、宴会でも上座に着く。また客代表として宴会を始める合図をしたり、買い取り儀礼を行う同村人たちに金品を渡したりする。彼の役割はスヴァートやドルーシカと重複するものが多い。

「スヴァート」という名称は「姻族」と「仲人」、そして結婚式当日の特定人物という3つの意味を持つために、その名で呼ばれる人物の特定が難しい。花婿側と花嫁側の親族は、お互いを「スヴァート」、「スヴァーチヤ、スヴァーハ」と呼びあうが(97)、同じ語が同じ場面で特定の役割を持つ人物を指して使われることもある。ここでは結婚儀礼名称として特定の役割と結びついた使用例のみを取り上げる。

花婿側で「スヴァート」と呼ばれるのは、結婚式前の仲人か、もしくは結婚式当日のメンバーである。この地域の仲人は既婚女性から選ばれることが多いため（女性仲人は「スヴァーハ」「スヴァーチヤ」と呼ばれる）、結婚式当日のスヴァートが常に仲人本人とは限らない。結婚式当日のスヴァートの役割は、トィシャツキー、特にドルーシカに近い。たとえばセメンツォフスカヤ郷のスヴァートはドルーシカの特徴とされる手ぬぐいを肩にかけるなどして、完全にドルーシカに取って代わっている(98)。一方ノヴォニコリスカヤ郷では、結婚式二日目にスヴァートを結婚締結の「首謀者」として罰する冗談行為も報告されており(99)、スヴァートが仲人的性質を保持していることもわかる。スヴァートを務める人物の属性は全

96 『家庭訓』の67章「結婚儀礼（Чин свадебный）」は、シリヴェストルによって編纂された「コーンシン版」からは省かれている。

97 *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.214. Л.2-3. 標準ロシア語では сватья（女性姻族）と сваха（女性仲人）を区別する。これは都市で女性仲人が一般的であったことと関係すると思われる。*Жирнова.* Брак и свадьба. С.35-36.

98 *Голубцов.* АРЭМ. Оп.2. Д.183. Л.10. この地域にもドルーシカはいるが、肩に手ぬぐいを掛けていない。

99 *Зверов.* Свадебные обычаи. С.93. 「スヴァートいじめ」はロシアの一般的な儀礼とは言えないが、トヴェーリ県カリャジンスク郡や、グリャザヴェツ郡に隣接するトチマ郡でも報告されている。*Шейн.* Великорусс. С.639-640; *Дилакторский П.А.* Свадебные обычаи и песни в Тотемском уезде, Вологодской губ. // Этнографическое обозрение. 1899. Кн.42. №3. С.165.

く説明されていないが、仲人的行為とドルーシカとの類似から、中年以上の男性であると推測される。

花嫁側の「スヴァート」は前述のように花嫁の兄弟か姉婿が行う。その役割は花嫁の兄弟と花婿側のスヴァートの役割を一つにしたものだ。彼は花婿宅で接待を受けたあと、花婿側の婚礼行列に加わって自宅に戻り、花婿たちが花嫁を手に入れられるよう、花婿たちを家に通したり花嫁をテーブルに連れてきたりなどして手助けをする。だが教会への道中ではわざと婚礼行列を停めて花婿側から金品を求めるなど、花嫁側の代表としての顔も見せるのである。彼の行為からは、「スヴァート」という語彙の持つ「姻族」と「仲人」の両方の意味を読み取ることができる。おそらくこの二つの意味が混ざりあい、新しい役割を生んだのだろう。

「ドルーシカ」は結婚式の指揮者として、儀礼名称の中でもっとも知られた存在である。地域によってはドルーシカに多くの役割が集中するが、グリャザヴェツ郡では他のメンバーと役割を分担しあうため、その機能も比較的単純だ。この地方のドルーシカの中心的役割は婚礼行列の統率者であるが、しばしば花婿の兄弟やスヴァートとともに行動する。ドルーシカになる人物の選択範囲も、スヴァートと同じくほとんど説明されていない。この傾向は著者がフィールドワークを行った1997年にも確認できた。年配の住民はドルーシカについてよく覚えていたが、その属性には注意を払っておらず、得られた答えも「式の進行が出来る中年の男性親族がよい。しかし同村人でもよい」という曖昧なものであった。別の地域での調査では、ドルーシカの属性に関して「花婿の兄弟」(アルハンゲリスク州カルゴポリ地方)、あるいは「非親族の専門家」(コストロマ州ヴォフマ地方) という明確な答えが返ってきたことから、ドルーシカの選択範囲が限定されていないこと自体が、グリャザヴェツ郡の特徴であると結論できる(100)。

花嫁側の「スヴァーハ」は、仲人および登場例の少ない花婿側のスヴァーハを除き、グリャザヴェツ郡唯一の主要女性名称である。スヴァーハは花嫁の世話人かつ花嫁側の女性親族代表であり、その中心的意味は『家庭訓』時代から変わらない。彼女は花嫁の兄弟と並んで花婿側との交渉にあたり、花婿のドルーシカやスヴァートとともに新婚夫婦の世話をする。この役割には教母またはその他の既婚女性親族が選ばれていた。

グリャザヴェツ郡の主要儀礼名称の特徴は、それぞれが中心的な固定的役割をもちながらも、相互に多くの役割を共有していることにある。その原因は何よりも、彼らの多くが「一族の代表」というあまりにも近い意味を持つことに求められる。また一族を代表する人物が多い理由は、結婚儀礼当日に、様々な関係を調整する必要性が集中することと無関係ではないだろう。調整範囲は同一親族内、双方の親族間、当事者および招待客と宴会に呼ばれなかった非親族との関係など、様々な局面に及んでいる。

次節ではこれらの様々な関係も視野に入れながら、結婚儀礼に現れた親族関係の特徴をまとめていく。

100　ドルーシカの属性に関する詳細は、伊賀上「ドルーシカ……」15-17頁を参照。

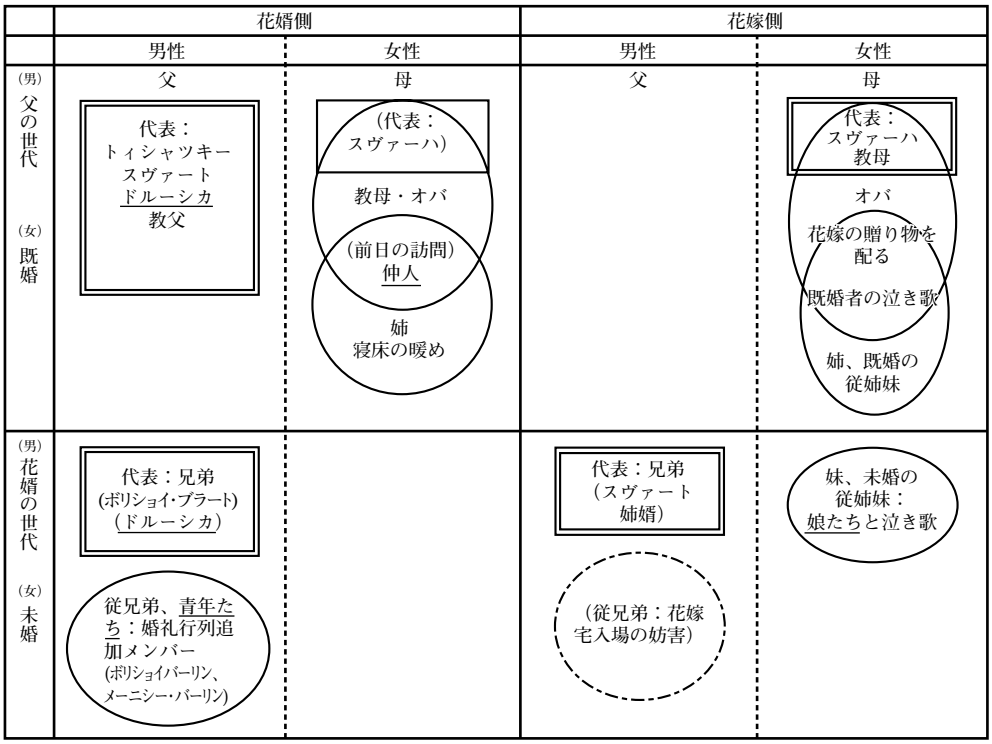
5.4 「親族」の役割を規定する関係

5.4.1 年齢・性別原理と親族認識

グリャザヴェツ郡の結婚儀礼における親族の役割には、年齢・性別原理が顕著に現れていた。年齢・性別は人間社会の基本的な分類基準であるが、ロシア農民の特徴は女性の儀礼的役割が大きいことにある[101]。図 4 はグリャザヴェツ結婚儀礼における親族の役割を、年齢性別を基準に図式化したものである。最重要人物である双方の父母については、具体的な説明を省略している。また非親族は親族と関連する限りで記載した。年齢による分類基準は男女で異なり、女性は既婚と未婚で、男性は世代で分けられる。ただし婚礼行列の追加メンバーには父の世代も含まれ得る。

図 4 ：年齢・性別に基づいた親族の役割分類（グリャザヴェツ郡）

四角で囲んだものは、一族代表の意味を持つ人物。
（ ）内は希少例。下線は非親族も可。



この図を見ると花嫁側では女性親族の、花婿側では男性親族の役割が大きいことが改めて理解できる。前述したように主要な儀礼名称は花婿側の親の世代の男性に集中するが、ド

101 ロシア農村の年齢・性別原理と儀礼の関係については次の先行研究がある。 *Бернштам Т.А.* Молодежь. Л., 1988; *Тульцева Л.А.* Община и аграрная обрядность Рязанских крестьян на рубеже XIX-XX вв. // Русские. М., 1989. С.45-62.

ルーシカだけは花婿世代との関係も深く、二重の属性を持つ(102)。また既婚女性は必ずしも儀礼名称を持つわけではないが、花婿側では仲人および前日の花嫁宅訪問など、双方の仲介者としての役割を持ち、また花嫁側では花嫁の贈り物の配布や泣き歌など、花嫁を助ける役割を多く担っている。楕円の重複からわかるように、既婚女性は一つのカテゴリーとしていくつかの役割を共有している。同様のことは花婿側の親世代の男性にも当てはまる。彼らはトィシャツキー、スヴァート、ドルーシカ、時に教父自身として登場するため、一見個々に区別された役割を持つように見えるが、それぞれの名称担当者の選択範囲と具体的役割は、相当な割合で重複し、交差していた。

前述したように年齢による分類基準は男女で異なる。この性別による分類基準の違いは、英語の「Miss（未婚）」と「Mrs.（既婚）」の分類と同様、結婚が男女に与える（とされている）社会的意味の非対称性に発することは間違いない。しかしこれまで見てきたように、男性親族の役割には、相手側との交渉と合意の確認、および花婿・花嫁に対する保護・監督義務（権）など法的性格を帯びたものが多い。それゆえ実社会で責任ある立場を持つ親世代の男性親族と、花婿と同世代の兄弟が区別されると考えられる。

このような年齢・性別に基づく分類は、親族だけではなく非親族にも共通して見られた。第3章「グリャザヴェツ郡の結婚儀礼」で説明したように、買い取り儀礼を行う非親族は、性別、年齢、既婚/未婚によって別々のグループを形成し、また娘たちの泣き歌の集まりや若者の遊びの会は、花婿・花嫁の同世代者を主要参加者としていた。図4からわかるように、この花婿・花嫁の同年齢者の間では、親族と非親族が同一の役割を持つ傾向がある。この年齢グループ、特に娘たちの間では、親族性よりも同年齢性が重要な意味を持っているのである。

年齢・性別原理が儀礼内の役割分担を強力に規定しているのに対し、系譜関係によって一対一で固定された役割は、父母兄弟と教父母のものを除いてほとんど見られない。このことはグリャザヴェツ郡の「親族（родня）」の範囲、および親族間の関係が、選択的に構築されていることを示している。確かにグリャザヴェツ郡の農民は親族を重要な範疇と見なしており、その中でも親等の近い血族を重視する傾向は確認できる。しかし父方・母方の違いは親族名称の中でも結婚儀礼の中でも強調されず、また儀礼内での祖父母の不在や姉婿の従兄弟への優越に見られるように、血縁原理、年長原理の尊重も限定的なものであった。系譜関係や血縁関係だけで自動的に相互関係が決定される「組織」が、核家族の範囲を越えて存在しないのならば、それ以外の者たちについては、個人的な親しみや地位、地理的近接性など、他の要素を考慮に入れて関係を再確認していく必要が生じる。つまりグリャザヴェツの結婚儀礼は、年齢・性別規範に基づきながら、個人にとって重要な親族関係を選択し、それを強化していく場として機能しているのである。

5.4.2　血縁関係と地縁関係

ここでもう一度結婚儀礼における親族と非親族の分類問題に立ち返り、地縁と血縁、そして親族性の相関関係を考えたい。

102　ドルーシカの持つ青年性については、伊賀上「ドルーシカ……」17-18頁で分析した。

5.1節ではグリャザヴェツ郡の結婚儀礼の参加者を3段階に分類したが、そこからは親族と非親族の関係について2つの特徴を指摘することができる。第一にこの地方では中心的儀礼行為者がほぼ親族であり、非親族を名誉職として招待する習慣があまり発達していない。第二に非招待者が披露宴のテーブルのすぐそばまで来るなど、様々な重要な役割を持つことから、非親族の存在が無視しえないものであることがわかる。つまりグリャザヴェツ儀礼では親族関係が優先されつつも、非親族を儀礼の場から排除するような過度の緊張関係も生じないのである。

第1点に関しては次のような疑問を呈することができる。すなわち擬制的親族である教父母が重要な位置を占めること、また仲人とドルーシカが非親族でありうることが、非血縁関係の強化と見なせないかということだ。しかし、グリャザヴェツの教父母は血族から選択されることも多く、さらにスタロヴェーロフの言葉に従えば、教父母関係が個人に与える影響もさほど大きくはなかった(103)。つまりこの地方における洗礼時の教父母の選択は、結婚儀礼におけるトィシャツキーやスヴァーハの選択と同様、主に既存の親族関係を強化する側面しか持っていないことになる。一方仲人とドルーシカを非親族から選ぶ理由については、彼らに特殊能力が要求されることと、またバイブリンが主張するように、二つの親族の仲介者には第三者が適しているということで説明できるだろう(104)。なおグリャザヴェツ郡でも裕福な家族は司祭を招待するが、これは箔付けや神の加護の希求から行われることで、庇護関係の形成ではない。以上からグリャザヴェツ郡に見られる中心的行為者の選択の中では、地縁関係の強化を一義的に目指したものはないと結論することができる。

第2点に関しても、非招待者が道を塞いだり邪視をかけたりすることを、まさに彼らが儀礼から排除されている証拠と考えることもできる。しかしこれら非招待者の「働きかけ」は、その後（あるいは事前に）当事者側と合意に至ることが前提となっている。親族および招待客としての非親族は、買収や防御呪術という積極的、消極的方法を通して非招待者から結婚の承認を得るのであり、そこに非招待者の意向が黙殺されるケースとの違いがある(105)。

グリャザヴェツ郡の結婚儀礼で、親族関係の優遇と非招待者重視のバランスが保たれるのはなぜだろうか。その理由として考えられるのは、血縁関係と地縁関係の重複である。中心的儀礼行為者たちが親族であると同時に地縁関係者であれば、非親族を介して改めて地縁関係を強化する必要はない。親族と非親族をめぐる様々な関係も、両方の属性を持つ者が仲介すればスムーズに進むと考えられる。

もっともグリャザヴェツ郡には、農村共同体内の地縁と血縁の重複を示す明らかな証拠はない。だが親族体系と地縁共同体との関係を考察してきた研究の中には、ロシア農村共同体全般にこの両関係の重複を認める意見が存在する。たとえば佐藤氏はロシア諸県の様々な地域に相互に深い関係を維持する複合共同体（村と諸部落）が存在したことと、ロシア農民間にある一定の婚姻圏が観察できるという「地域的内婚への強い傾向」に注目している。そして「オプシチーナは地縁的な『隣人団体』の外観を呈していたとしても、その内部に血縁的

103 *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.214. Л.1. もちろんリストヴァが示したように、ロシアには教父母関係が重要な意味を持つ地域も多いが、その場合でもしばしば、教父母をオジやオバなど血縁者から選択しようとする傾向が観察されている。См.: *Листова.* Кумовья... С.44-45.

104 *Байбурин.* К описанию... С.11.

105 非招待者が与える儀礼的承認の種類については、伊賀上「北ロシア……」250-252頁参照。

な原理を含むものであったと言うことができるのではないだろうか[106]」という結論に達している。

グリャザヴェツ郡の農村共同体には、「閉鎖的共同体」、つまり「構成員全体が遠近の親族関係で結ばれているような集団[107]」を強く連想させる特徴はないが、「地域的内婚」の傾向が見られないわけではない。前述のように、グリャザヴェツ郡の農村共同体は内婚単位ではなく、かといって中国の宗族のような外婚単位でもなかった。しかし結婚儀礼の記述によると、花婿側と花嫁側に面識がない場合でも、ほとんどの場合は間に共通の知人（隣人や親族）が存在した。筆者の聞き取り調査でも、1930年代の婚姻の幾つかが、他村に婚出した女性親族を仲介として成立したことが確認できた。それゆえグリャザヴェツにも限定的な婚姻圏があり、地縁と血縁に何らかの重複があったことはほぼ確実である[108]。

だが物理的な血縁関係自体は、社会的意味づけなしには何の意味も持たない。血縁関係は各人の親族関係の中や外に位置付けられて初めて、その他の社会関係と相互関係を持つ要素となりうる。ロシア農民のように単系の出自集団を持たない社会の場合、よほど小さな共同体でない限り、血縁と地縁の重複は全共同体員の同一親族への帰属を意味しない。さらにグリャザヴェツ郡では親族内でさえも、血縁原理が特権的な意味を持っていなかった。以上を考慮するならば、グリャザヴェツ儀礼の三段階の参加者構造は血縁と地縁の重複を意味するだけではなく、血縁関係が地縁関係に転化していく過程、さらにその地縁関係も二段階に分類していく過程を反映していると理解できる。血縁が確認できる者を結婚儀礼に招待しないことは、その人物と当事者間の「親族性」が忘れられていくことであり、同時にその人物を「親しい隣人」以下に位置付けることを意味するのだ。

グリャザヴェツの結婚儀礼は「親族」と「非親族」の境界を引き直すと同時に、それぞれの内部関係も再構成していく。地縁関係が強調されるグリャザヴェツ郡およびロシアでは、結婚儀礼は「親族」という枠組みを用いて個人間の相互関係を定義する数少ない機会として、当事者たちだけでなく農村共同体全体にとっても重要な意味を持っていたと言えるだろう。

6. まとめ：グリャザヴェツ郡の親族関係の特徴と現況

結婚儀礼における親族内での役割分担は、父母兄弟・教父母を除いては系譜上の位置を反映するものではなかった。男女差や世代、既婚・未婚の違いに依拠した分担は、農村儀礼全体を規定する年齢・性別原理に基づいたものだが、具体的行為者の選択基準として、親等の近さ以外に安定したルールは見つからず、親族内関係が選択的に構築されることがわかった。

106　佐藤『帝政ロシア……』89頁。

107　同上88頁。

108　「地域的内婚への強い傾向」は、狭い通婚圏を形成するとは限らない。ヴォログダ県およびアルハンゲリスク県では、「Ближняя - ворона, а дальняя соколена （近所からの花嫁はカラスだが、遠方からのは鷹のようにすばらしい）」という表現がある。花嫁は実家の近くに嫁ぎたがるが、花婿は他村者を好む傾向があったのである。См.: *Иваницкий Н.А.* Материалы по этнографии Вологодской губернии // *Харузин Н.* (ред.) Сборник сведений для изучения быта крестьянского населения России. Вып.2. М., 1890. С.63; *Бернштам Т.А.* Русская народная культура Поморья в XIX - начале XX в. Л., 1983. С.120.

スタロヴェーロフは「どの段階の親族でも他人より厚遇し、敬いあう。お互い助け合ったり、お金や穀物を貸したりする」[109]と述べている。教父母が血族から選ばれ、結婚儀礼の名誉職が非血縁関係の強化に用いられないということは、農村共同体の「結（ゆい）」的相互扶助を除けば、親族関係以外に十全たる相互扶助組織が存在しないことを意味する。結婚儀礼に現れたのは、「親族＝相互扶助集団」という観念に基づき、血縁や親等、その他の関係を参照しながら進めていく、個人を中心とした具体的な「親族関係再構成」の過程であった。この過程では、個人にとってもっとも重要な関係が選択されると同時に、物理的な血縁関係の一部が地縁関係へと変換される。そしてこれらの新しい関係は儀礼を通して公表され、他の人々にも認知されていくのである。

この選択的な親族・非親族関係は、あくまでも19世紀末から20世紀初めのグリャザヴェツ郡という限定された状況を反映したものである。この特徴が同時代のロシア農村の中で例外的存在であるとは思わないが、農奴解放前、産業革命前の時代にも共通していたと断言することはできない。たとえばグリャザヴェツ郡の買い取り儀礼は、20世紀初頭に年齢・性別原理に基づいて発達したが[110]、これはその時代に年齢・性別原理が強化されたためではない。むしろこれは年齢・性別原理が崩れていく直前の現象であり、非招待者層の中心をなす若者層の主張が強くなっていく段階であった。同様に親族関係についても、それ以前の規定的な相互扶助関係が崩れ、関係の再構築を迫られる時代となっていた可能性もある。

ソ連時代に入ると、参加者構造にも大きな変化が起こった。この変化は三段階の参加者構造が「招待客と手伝い」の二段階構造へと集約していく形で現れた。最初の大きな変化は儀礼的行為者名称の消滅であった。名誉職で具体的役割の少なかったトィシャツキーの名は、すでに1930年代には聞かれなくなっていた。儀礼の指揮者として実務的役割を担っていたドルーシカやスヴァート、スヴァーハは比較的長く存在したが、それでも1960年代までには消えた。現代の儀礼では花嫁と花婿の友人男女からなる「立会人（свидетели）」が、ドルーシカとスヴァーハの後継者として儀礼の進行役を担っている[111]。

一方招待客の範囲は拡大した。親族は以前と同様おおぜい招待され、血縁的にも地理的にもかなり遠い範囲の人々が集合する。それに加えて、かつては招待客に含まれることがなかった花婿や花嫁の友人、そして生業の変化を反映して職場の同僚たちも宴会に臨席するようになった。招待客の間では宴会の席や役割による差別化はほとんど見られなくなり、親族、隣人、花婿・花嫁の同年齢者たちは対等な立場に置かれている。だが非招待者に関しては、その主要参加者である若者が「招待客」に昇格した関係で、その存在意義が著しく減少した。現在でも非招待者は道をふさいで買い取りを要求するが、宴会の場に来ることはほとんどない[112]。

---

109 *Староверов.* АРЭМ. Оп.2. Д.214. Л.3.

110 時代が下がるにつれ、買い取り儀礼の対象物に「馬」「沈黙代」「旗、照明代」などが加わり、買い取り要求をするグループが細分化する傾向がある。

111 ソヴィエト儀礼としての登録式と「立会人」の普及については、次を参照。伊賀上菜穂「ソヴェト連邦における結婚儀礼改革：コストロマ農村の事例より」『ロシア史研究』第66号、2000年、32-41頁。グリャザヴェツ結婚儀礼のソ連時代の変遷については、伊賀上『ヨーロッパロシア……』156-163頁、参考資料115-126頁に記述した。

112 小村、特に過疎化が進んだ地域では、隣人である同村人たちを全員招待するため、非招待者の同村人というカテゴリー自体が成立しない。

これらの儀礼変化は革命によって突然もたらされたものではなく、帝政末期に既に見られた変化が加速した形で現れたものである。ソ連時代の変化の原因となったのは、農耕と暦上儀礼に基づいた年齢・性別原理と、慣習法的財産所有および相続権に基づいた親子関係の消滅であり、その混乱はロシア農民の「民族誌的過去」である19世紀後半には既に可視的であった。これに対し相互扶助集団としての親族の重要性、およびその選択的性格は今日まで引き継がれている。一方ソ連政府が目指した個人と国家の直接的な結びつきは、ついに達成されなかった。ソ連政府は結婚登録式やコルホーズ結婚式などを考案し、セリソヴェートやコルホーズ・ソフホーズに代表される「新しい地縁関係」の強化を図ったが成功せず、友人と親族からなる私的関係と、地縁や職場に基づく公的関係との距離が拡大していく結果となった。ソ連政府は、従来の農村共同体が共同体成員に対して持っていた影響力を引き継ぐことができなかったのである(113)。

ソ連が崩壊し、コルホーズ・ソフホーズが生活維持制度として機能しなくなっている現在では、私的関係、特に親族関係の重要度はますます増大しているようである。かつての親族関係が選択的であり、また地縁共同体と補完的・連動的な関係を有していたことを考えれば、現代農村における社会集団の再編成を、親族研究を通して読み解いていくことも不可能ではないだろう。

終わりに：記述分析の問題点

本論文は記述の不十分さと参与観察の不可能性という問題を踏まえた上での記述資料分析の試みであったが、分析を終えてこの二点の深刻さはより明確となった。記述資料には記述者およびインフォーマントが意識しなかった事実は反映されない。今回はグリャザヴェツ郡の準主要参加者の特徴として、「ある基準を満たした選択範囲」の存在を指摘したが、記述されなかった選択傾向があった可能性はある。父方、母方の区別が本当になかったのか、同村人と親族は実際にどの程度重複したのか、ある人物に一定の儀礼名称を任せた真の理由は何なのか、そして実際の席順はどうであったのかなどは、今日ではすでに観察不可能な事象である。また「例外事項」を「偶然一例しか記録されなかった事項」から区別するのはほぼ不可能であり、地域差を厳密に追求することには限界があった。だがこの問題は分析対象地域を広げれば解決される問題ではない。多様性が大きいという事実は、当然ながら広域研究の困難さも意味している。

今後記述資料から帝政時代の親族分析を進めるには、次の二方向が考えられる。一つは分析対象地域を限定して、葬儀・洗礼、裁判記録等、結婚儀礼以外も考察対象に加えていくことである。もう一つは他地域の結婚儀礼分析を同時代あるいはより早い時代で行い、比較研究を行う方向である。グリャザヴェツ郡は親族に関する情報が比較的少なく、逆に同村人の役割に関する情報が多い地域であった。たとえば佐藤氏が紹介した血縁的原理の強い地縁共同体（閉鎖的共同体）では、まったく異なった選択パターンが観察されるかもしれない(114)。またカザークや郷士（однодворцы）、旧教徒など独自の「伝統」観を持つ人々、あるいは漁

113　伊賀上「ソヴェト連邦……」37-38頁参照。
114　佐藤『帝政ロシア……』81-89頁。

民やアルテリを組織して手工業を営んだ地域など、農業とは違う生業を発達させた人々も、異なった親族観を持つ可能性がある。今回の分析結果が、多方面からの研究によって補足、修正されていくことを期待する。

Опыт изучения системы родства у русских крестьян по материалам свадебных обрядов конца XIX-начала XX вв.

ИГАУЭ Нахо

Какое значение имеет для русских сельских жителей эпоха Советского Союза? Чтобы ответить на этот вопрос, на мой взгляд, важно познать динамику культурных изменений: какие элементы культуры транслировались, а какие нет с дореволюционного общества на постсоветскую жизнь. Для сравнительного анализа я выбрала один из важнейших социальных элементов - «родство». Как источник изучения системы родства у крестьян анализируются свадебные обряды Грязовецкого уезда Вологодской губернии конца XIX - начала XX вв.

В данной статье я преследовала цель - представить свадебные обряды как целостный комплекс. Для этого я специально ограничила объект наблюдения до административной единицы «уезд», точнее говоря, до восточной половины Грязовецкого уезда, и анализировала целостный процесс свадебных обрядов как со стороны терминов, так и совершаемых действий.

Грязовецкий уезд находился в юго-западной части Вологодской губернии, не очень далеко от губернского центра г. Вологды. Из 7 волостей, выбранных в статье в качестве объекта наблюдения, в 3 волостях численно превосходили бывшие частновладельческие крестьяне, а в остальных - бывшие государственные. Следует еще указать, что одна южная волость отличалась от других давним распространением отходничества. Так как этот уезд был расположен на границе между северной и центральной частью Европейской России, там ярко наблюдались культурные традиции обеих территорий.

В частности, в свадебных обрядах можно найти много общих черт как с северной, так и с центральной частями России. Но вместе с тем грязовецкие обряды имеют ряд существенных отличий, например, отсутствует обряд в бане, наблюдается небольшое количество магических элементов (включая и сглаз, и колдовство), развиты разные формы выкупа со стороны жениха. На основе локальных материалов по свадебной обрядности, можно утверждать, что в восточной части Грязовецкого уезда отмечаются 4 субтипа свадебных обрядов. На мой взгляд, деление на субтипы совпадает исключительно с географическим расположением. Я не заметила влияния бывших крестьянских категорий или типа хозяйствования на структуру обрядов.

На основе грязовецкой системы терминов родства, которая очень близка к системе современного стандартного (литературного) русского языка, можно сказать, что система родства у грязовецких крестьян носит эго-фокусный (ego-focal) характер, т. е. родственников определяют в зависимости не от общих предков, а от отношения с «эго» билатерально без разницы сторон отца и матери, и даже включаются в «родство» и некровные: свойственники, крестные и приемыши.

В анализе свадебных обрядов я обращала особое внимание на рамки упомянутых родственников, характер и время их действий. Однако большое количество обрядовых терминов свадебных чинов и вместе с тем недостаточная информация о выборе конкретного действующего лица для каждого чина не разрешают определить зависимость между каждым действием и действующими лицами. Поэтому я анализировала действующих в обряде лиц двухстепенно, т. е. сначала классифицировала участников по генеалогическим статусам (отец, тетя, зять и т. д.), потом по свадебным чинам (дружка, сваха и т. д.). Результат анализа ценен с точки зрения двух аспектов познания системы родства: «половозрастная система» и «отношения между родственниками и не-родственниками».

В грязовецких свадебных обрядах выбор действующего лица для определенного действия не определяется в большинстве своем по генеалогическому статусу. Исключение, естественно, составляют родные родители, родные братья и иногда крестные родители. Зато многие обрядовые роли у родственников разделяются по половозрастной системе. Это особенно касается замужних родственниц (тети, крестная мать и замужние сестры), от которых выбирают исполнительниц свахи, раздачи невестинов даров и т. п. От родственников мужчин отцовского поколения со стороны жениха выбираются главные свадебные чины, тысяцкий, сват и дружка, действия которых во многом совпадают. Что касается парней и девушек, то родственники и не-родственники часто исполняют одну и ту же роль: парни - участники в свадебных поездах, девушки причитают у невесты.

В материалах по свадебной обрядности можно найти данные, свидетельствующие о том, что в одной половозрастной группе предпочитают родственников более близкой степени родства: предпочитают, например, родную сестру двоюродной. Но следует указать, что в грязовецких свадебных обрядах не наблюдается предпочтение какой-либо одной стороны родства (отца или матери), а также категорическое следование принципу старшинства и кровных связей. Последние, в частности, отражаются на отсутствии в материалах по свадебным обрядам сведений о дедушках и бабушках и так же на факте предпочтения зятя двоюродному брату как «заместителя» родного брата.

Можно сделать вывод о этом, что в том регионе исполнителей свадебных обрядовых ролей выбирают сравнительно свободно, из широкого круга родственников по половозрастной системе. Это доказывает, что свадебные обряды есть событие, подтверждающее и реконструирующее внутренние связи между родственниками.

Что касается связей между родственниками и не-родственниками, то участники в свадебных обрядах разделены на три группы: 1. главные свадебные чины, 2. званые гости без специальной роли и помощницы (поварихи), 3. незваные гости. Большинство участников первой группы - родственники, третьей - не-родственники, а во вторую группу включаются обе категории. Анализ материала по данному вопросу позволяет выделить две характерные черты. Во-первых, в этом регионе не развит обычай укреплять отношения с не-родственниками, специально назначенными на важные свадебные чины в знак почтения и уважения. Крестных родителей могут выбрать из не-родственников, но в исследуемом регионе чаще всего выбирают из кровных родственников. Во-вторых, несмотря на вышеуказанное, не-родственники тоже активно участвуют в обрядах как званые гости и даже как незваные. Последние дают общинное согласие на брак, требуя выкупа от гостей даже во время застолья.

В грязовецких свадебных обрядах можно наблюдать совмещение предпочтения родственников и выражения уважения к общине, причем без серьезного коммуникативного напряжения двух категорий участников свадебного обряда. Такой «баланс» в достаточной степени объясняется совпадением отношения кровного с соседским. Но у русских крестьян, которые не имеют «систему родства патрилинейного происхождения» (patrilineal descent group), люди с физической кровной связью не всегда считаются родственниками. Таким образом, можно сказать, что свадебные обряды функционируют как процесс, способствующий переключению отношений между людьми с кровной (родственной) связи на просто соседское.

Выводится следующее заключение. В исследуемом регионе внутренняя и внешняя форма «родства», функционирующая как вид взаимной помощи, изменяется в зависимости от конкретных отношений между людьми. В такой ситуации свадебные обряды представляют семьям жениха и невесты редкий случай познать и реформировать «свою» рамку родства и его внутренние отношения. Но здесь следует подчеркнуть, возможно такой выборочный характер «родства» появился только после распада бывшей системы

взаимной помощи среди родственников, которая была действенна до промышленной революции.

В советское время отношения между участниками свадебного обряда подверглись изменениям. На современной свадьбе почти не существует иерархии гостей, нет разницы между старшими родственниками и молодыми друзьями. Незваные уже редко заходят на застолье. Такие изменения стали наблюдаться уже в конце XIX века: половозрастной принцип терял свою символическую и обрядовую основу. Но познавательное понятие родства не изменялось и родство до сих пор продолжает функционировать как система взаимной помощи и поддержки в условиях тяжелой социальной ситуации.